

日本人による探検調査のうち、そのルートの点で、もっともすぐれた重要なものは、滿洲國建國の直後、一九三四年六月におこなわれた。奇乾警察北部大興安嶺調査隊とよばれるこの隊については、一般にはほとんど知られていない。隊は、三二名（日本人警官三名・滿人警官一名・軍関係者三名・滿鉄社員六名・滿人雜役夫二名・ロシア人雜役夫七名）と馬五二頭から成り、六月八日奇乾を出発し、南東に向ってジン山脈をこえ、ビストラヤ中流のオーコリドイ山麓をへて、ビストラヤ上流の最初の大屈曲点のあたりで分水嶺をよこぎり、ゲン河を下って七月三日メルゲンの町にでた。一日の平均行程は六里半、騎馬旅行としてもかなり速いスピードで、完全に滿洲高原の中央部を横断した。横断そのものにはたいした困難はなく、過労のため馬七頭をうしなつたにすぎない。この成功の原因は、ロシア人とその馬とを活用して、旅行の速度をはやめたのと、出発後数日でトナカイ・オロチョンにであり、その一人を終始道案内として使つたのによることはあきらかである。

横断そのものは、ひじょうな成功であつたが、この隊は、ほとんど地理的な知識の寄與には役だつていない。隊としてのただひとつの報告である、ガリ版ずりのプリントには、地図もなく、山系・水系についての正確な理解は、まったく欠けている。滿鉄社員のなかには、数人の科学技術者がふくまれ、そのひとり山島貞雄は、べつに、地質調査の結果と、ルート・マップとを發表したが、その図には、あきらかに五〇万分の一図にあわせようとする努力がみられ、もちろん正しい地図と照合することはできない。いろいろの点から考えて、もしキラムトへ交易にでるオロチョンの一行と、運よくであつていなかったならば、探検経験と地理的知識とを欠いた隊の、五〇万分の一図にたよる旅行は、あるいは悲劇におわつていたかもしれない。

好運にめぐまれたこの隊をのぞけば、大規模の調査隊は、すべて失敗におわつた。たとえば、一九三八年夏には、長春の大陸科学院が、一九三九年夏には、滿鉄調査部が、それぞれ、メルゲンからゲン河をさかのぼつて主

稜上に出、モーホにぬけようとするモチュールスキー・ルートをこころみて、どちらも成功しなかった。後者を例にとってみると、隊員は四四名（正隊員一〇名・警備員一名・人夫一九名・オロチョン四名）の大部隊で、七月二五日メルゲンを出発、八月二〇日ゲン河の最上流に達したが、「人馬ともに疲労その極に達し」^⑧ひきかえした。失敗の直接の原因は、輸送用としてモンゴル風の車を使ったためで、三六台中二〇台をうししない、馬も五二頭のうち一〇頭をなくした。湿地と森林とのなかで馬車をつかうことは、それ自体がむりなのは当然であるが、こうならざるをえなかったのには、ほかに原因がある。

それは、やはり、この種の調査隊における探検技術の傳統の不足に帰しなければならぬ。具体的には、探検のティピカルな場合のひとつ、処女地の無補給行進に必要な、輸送技術の研究不足が原因であった。途中で物資の補給地のない、ながい旅行のためには、探検隊は、すべての装備・食糧を全部はこんでゆかなければならぬ。それには、なにかの動力源がいる。未開地の探検では、動力源は、たいていの場合、ウマ、イス、トナカイなどの動物である。ところで、動物の数をふやせば、どんなたくさんの荷でもはこべるが、同時に動物のせわをする人間がたくさんいり、また動物や人間の食糧もたくさんもってゆかねばならなくなる。荷物がふえれば、それだけよいに動物がいり、動物がふえれば、それだけ人と荷物がふえて、また動物を追加せねばならないだろう。この堂々めぐりの関係をどう解決するかに、無補給行進の技術が必要とされるのである。國際的にみれば、極地探検——ことに南極大陸やグリーンランドの氷原の旅行をめぐって、この技術は、すでに検討しつくされた感がある。

たとえば、グリーンランド氷帽をはじめて横断したナンセンたちは、みずからそりをひき、装備を極度にきりつめるといふ、超人的な方法で、この問題を解決した。おなじ年に南極点をあらそったアムンゼンとスコットは、

どちらも、いわゆる極地ポラリス法をとった。あらかじめ途中まで食糧をはこんで、点々とデポ（集積所）をもうけておき、かえりはそれをつたってくる方法である。アムンゼンは、犬にそりをひかせ、荷物がへって軽くなるにつれて、いらなくなった犬を射殺しては、人やのこりの犬の食糧にあてるといふ、綿密な輸送計画をたて、ノルウェーの旗をはじめ南極点にかかけた。これに対して、食糧としてエンバクを必要とする小馬ポニーをつかったスコットは、ロス氷原の吹雪のなかで、悲壯な最後をとげなければならなかった。おなじ道をひきかえすことのない横断計画のたぐいでは、事情はいっそう困難となる。こういう場合の輸送計画が、どんなに細心の注意を要するものかは、過去の探検報告書をひもといてみた人でなければ、想像することができないであろう。

森林地帯の夏の旅行では、そのような能率的な輸送具がつかえないから、かえって極地よりも条件がわるい。野生の草だけを食っていても、ある期間内ならなんとかやってゆける、じょうぶな土産馬をつかうことによつて、濃厚飼料をはこぶ労をはぶくことは、まず第一の条件であろう。コサックのロシア馬は、もっともよくこの条件をみたしている。満鉄の隊も、この方針はとっていた。しかし、これだけでは不十分だ。奇乾警察隊のように、軽装騎馬で行程をはやめるか、装備を極端にきりつめるか、出むかえ隊または航空機による補給を考えるか、なにかのくふうが必要である。これらの点で、この隊は、あきらかに不備であった。装備・食糧などのリストをみると、ぜいたくではないが、重さをへらそうとする心づかいがみられない。もっと野生食品に依存すること、食糧といっしょに、食えない罐やびんや水分を、なるべくはこばないようにすること、これは、探検食糧のモットーでなくてはならぬ。途中での補給も考えられておらず、人数ばかりがおおかった。こういうことがつもりつもって、むりとは知りながらも、馬車をつかわねばならなくなったというのが真相であろう。その結果は、馬車に荷をうつして出発したその日に、馬車二台がこわれてすてられ、つぎの日には修理を要するもの一三台と

いうみじめな失敗となったのである。

中央部への探検は、このように失敗をくりかえしたが、北部大興安嶺の周辺部では、かなり活潑な調査活動がみられる。たとえば、林業関係の調査隊は、一九三七年にはクマラ河流域に、一九三九年にはガン河流域に、一九四〇年にはビストラヤ流域に、それぞれ森林調査をおこなっている。その調査範囲はよくわからないが、たぶん中流ないし下流部にかぎられていたものとおもわれる。一九四〇年度の調査は、大陸科学院による興安北省の資源調査の一部をなしており、林業関係のほか、土壌・永久凍土・地下資源・植物などの各部門の調査が、おもに三河地方を中心としておこなわれた。民族関係では、一九三八—三九年、滿洲國治安部によるオロチョン族の廣泛な調査が、特筆にあたいする。調査結果の学術的レベルは、かならずしも高くないが、大小興安嶺の周辺地域におけるおもなオロチョンの集團をもれなくおとずれており、貴重な資料を提供している。この一連の調査のうち、ビストラヤ流域のトナカイ・オロチョンに関する部分は、そのころかれらに対する政治工作の任務をおびていた、滿洲國軍の野々垣眞三、滿洲畜産会社の松下島治の両氏の实地踏査にもとづいている。このふたりの人々の調査範囲は、デルブル河上流から、ビストラヤの中流一帯におよんでおり、われわれの隊以前に、滿洲高原の中央部にまでふみこんだ、数すくない日本人のうちにかぞえられる。われわれの計画立案にあたって、この両氏におうところがおかつた。おもに中部大興安嶺を舞台とする、吉岡義人氏のオロチョン調査^④とともに、重要な業績といわねばなるまい。

さいごに、関東軍およびその測量隊の活動もみのがすことはできない。一九三九年には、三原参謀のひきいる地誌調査隊が、ゲン河からガン河にこえて、北部大興安嶺を横断した。このおなじルートは、一九四〇年に測量隊の一等三角班によりトレースされている。一九三八—四一年の期間には、一等三角班および二等三角班の測量

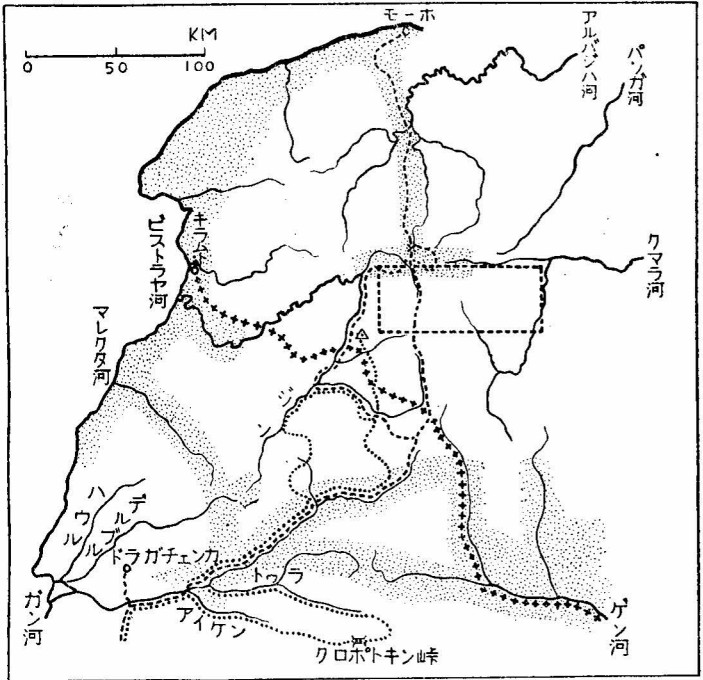


図 2. 最近のおもな探検隊のルート.

- プレチュケ 1932
- +++++ 奇乾警察隊 (推定ルート) 1934
- われわれの隊 1942

細点をほどこしたのは、1941年末までに三角網の設けられていた地帯、点線でかこんだのは、航空写真未撮影地帯をしめす。

に達し、東におれてクマラ河上流をふくむ一帯の三角網をもうけた。この測量にあたって、北緯五二度一分、東經一二二度三分にあたるアルバジハ河の水源に設置された一等三角網の基線は、三河から北上するわれわれの探検の本隊と、モーホから南下する出むかえ隊とのおちあう予定点として利用された。このようにうまく、経

活動が、きわめて活潑におこなわれて、かなり奥地にまで三角網がひろげられた。われわれのあつめた資料によれば、ガン河—ゲン河、ガン河中流—デルブル河源流—マルクタ河、ビストラヤ下流、アルグン河沿いに三河・モーホ間、などに、それぞれ三角網が完成していた。また、モーホから南下した一隊は、アルバジハ河の水源をへて、ビストラヤとその支流ニジネ・ウルギーチとの合流点附近

緯度のわかったおちあい地点がえられたことは、われわれの隊にとって、ひじょうに好都合だったのである。

この廣汎な測量活動についての記録が、まったく残っていないのは、ひじょうにさんねんといわねばならぬ。おそらく、これだけの奥地旅行には、ひじょうな困難と犠牲とがはらわれたであろうし、もし一―二の専門家が同行していたら、かなりの資料がえられたであろう。各部門の独立割拠主義は、建國のち数年をへた満洲國でも、すでに抜きがたい傳統となつてしまつていたのである。おちあい点からモーホへの道にそうて、ところどころに散らばつた馬の白骨は、わずかに測量隊のなめた苦勞をものがたつていた。

これらの三角測量と平行して、地形測量のほうは、満洲航空会社の手によって、航空写真測量により進行してゐた。北部大興安嶺一帶の撮影は、一九四一年の冬におこなわれ、ぼう大な量の一万分の一の写真が、整理をまつてゐた。戦後には、航空写真の利用がようやく一般化してきたが、そのころでは、一本々々の木が、ときにはひとつひとつの野地坊主が、はつきりとうつてゐる航空写真は、われわれの眼をみはらせるに十分であつた。

撮影はほとんど北部大興安嶺の全部をおおうていたので、もはやルートについての不安はまったくなかつた。白色地帯の探検を心にえがいて意氣こんでいたわれわれは、計画の進行とともにこれを知つて、拍子ぬけしたことはあらそえない。航空写真の撮影によるひずみを修正して、地図化するためには、三角点の位置を、实地踏査によつて、写真上に確定しなければならぬ。われわれの探検は、そのための絶好の機会であつたから、満洲航空からの全面的な援助をうけ、社員の山本幸雄氏が、そのために参加した。満洲航空では、計画の決定と同時に、一万分の一の縮写にとりかかり、できあがつた二〇万分の一の水系図は、まえにのべたような五〇万分の一図のあやまりを、出発の直前にいたつて、はじめて明るみに出したのであつた。この水系図のほか、われわれの予定ルートにそうした部分だけの一万分の一写真をたずさえていったが、その量は、ゆうに馬一頭分の荷となつて、

隊員たちをおどろかせた。

われわれにとって好都合なことに、ちょうど北部大興安嶺の中央部、ビストラヤの源流と、その大支流ウエルフネ・ウルギーチ、マンクイ、ニジネ・ウルギーチおよびクマラ河などの水源があつまって、ふくざつに錯綜しているあたりに、東西およそ七〇キロ、南北四〇キロのひろさの、未撮影地帯が、ポッカリとしろくのこつていた。ガン河をさかのぼったのち、ビストラヤにそうてすすむ本隊から、小人数の支隊をわけて、この白色地帯をまっすぐにつきぬけさせようという最後のな計画は、このニュースによって確定したのであった。支隊は、うまくこれに成功して、白色地帯のルート・マップをつくりあげた。満洲にのこされた、さいこの白色地帯における地理的な発見は、これによっておわりをつげた。シロゴロフからはじまって、二五年間、各国のひとびとの努力によって、つみあげられてきた知識に、さいこの一筆をくわえる立場におかれたわれわれの隊は、まことにめぐまれた幸運の隊であった。

〔註〕

- ① Schirokogorowa, J. N. (1919) Die nordwestliche Mandchurei: Geographische Skizze auf Grund von Marsch-, routenbeobachtungen. Učennyye zapiski istoriko-filologic. Fakulteta vo Vladivostoke. (aus Plaetschke 1937).
- ② Schirokogoroff, S. M. (1933) Social organization of the northern Tungus. Shanghai. 川久保悌郎、田中克己訳 (一九四一) 北方ツングースの社会構成。岩波書店、東京。そのほか、ツングースに関するシロゴロフの著作には、Psychomental complex of the Tungus. London, 1935. があつる。
- ③ Lindgren, E. J. (1930) Northwestern Manchuria and the reindeer-Tungus. Geogr. Jour. 75 (2).
- ④ Plaetschke, B. (1937) Das Bergland der nordwestlichen Mandchurei. Ergebnisse topographischer Erkundungen und landschaftskundlicher Untersuchungen. Petermanns Mitteilungen, Ergänzungsheft 232. Gotha.
- ⑤ Plaetschke, B. (1939) Landschaftskundliche Wesenzüge der östlichen Gobi. Wissenschaftliche Veröffentlichungen.

- ⑥ 木内信藏（一九四一）満洲西北部山地の地形及び景観調査。地理学評論一七卷八号、六八六—六九〇ページ。
- ⑦ 今世紀のはじめごろから着手された測量の結果である。
- ⑧ 倉重政雄（一九三四）北部大興安嶺調査報告。
- ⑨ 山島貞雄（一九三五）大興安嶺山脈横断地質調査。支那鉱業時報八三号。
- ⑩ 満鉄調査部（一九三九）大興安嶺縦断調査報告。北滿経済調査所編。
- ⑪ 福渡七郎（一九四二）木材の強度に関する研究（第一報）。大陸科学院研究報告六卷三号、二九—四六ページ。
- ⑫ 興安局・大陸科学院（一九四二）興安北省資源調査報告書、上巻。
- ⑬ 満洲國治安部（一九三九）満洲に於ける鄂倫春の研究、第一篇および第二篇。新京。
- ⑭ 浅川四郎（一九四一）興安嶺の王者。満洲事情案内所、新京。

出発の前夜

夜の前夜の出発

目標がきまってから出発までの六ヶ月、あわただしい出発前夜のことどもは、わたくしたち当事者以外には、あまり興味もねうちもないものがたりにすぎないかもしれない。しかし、この探検の完成にいたるまでに、おもしろい方面からよせられた、おもしろい好意のつながりをふりかえてみると、せめてそれらのひとびとを記念するためにも、ひととおりを記録にとどめておきたいという望みをおさえることができない。この節にあらわれてくる方々、さらにいちいち名をあげなかった人々にたいして隊員一同の心からの感謝をささげたい。

当時の情勢では、なによりもまず、軍の了解と援助とをえなければ、計画の実現しないことはあきらまかだつた。この難問題が、そのころの大阪商大の奥平定世教授と立命館大学の栗田義典学生課長の線から、むしろ個人

的なつながりをおして、やはりそのころの満洲國治安部（のちの軍事部）の高級顧問藤村謙少將に紹介されることによって、一挙に解決したのは、最初の幸運であった。このつながりをたよりに、伴と川喜田とは、目標の決定後一と月あまりで、すでに一九四一年のくれには、満洲にわたっていた。藤村さん夫妻の、青年の活動欲と學術的な研究とに対する深い理解と、それにもまして若い学生たちに対する愛情とが、わたくしたちを元気づけた。しかし、内地からきたわけのわからぬ若僧たちが、じぶんたちのなわ張りに侵入してきて、なにをするか、という現地の諸機関の反撥は、かなりつよいものであった。たとえ藤村さんの精神的な援助はあったとしても、総額二五〇〇〇円というかなりの費用をむこうもちにして、この計画を実現するために、われわれは、われわれだけの力で、とびらをたたかねばならないことが明らかであった。ま冬のハイラルにまで足をのばして帰ってきたふたりの報告は、かなり悲觀的であった。

四二年の新年には、京都大学の動物学研究室にいた可兒藤吉さんが、先発隊員のトップをきって、長春にわたり、つづいて伴が三月になって、可兒さんと交代した。先発隊員の経費は、栗田・奥平の両氏の手でとのえられた。内地では、奥平教授の紹介で大阪商大から小川が、栗田課長の紹介で立命館大学から箕村・川添が、山のぼり仲間として京都高等蚕糸から土倉・江原・加藤が、それぞれあたらしい隊員として参加してきた。森下さんと吉良・梅棹は、出発まえにポナペ島遠征の報告をまとめるのにそがしく、藤田は天測による経緯度測定の技術をおぼえるのに大わらわであった。新人たちも、それぞれトレーニングや準備にとりかかり、箕村は伴の助手として先発した。

この計画の実現のために、可兒・伴のふたりの先発隊員のはたした役わりは、じつにおおきいものであった。可兒さんは、個人的な事情で遠征そのものに参加することはできなかったが、その誠実な人がらによって、ます

長春の關係者たちに、この計画が、時局に便乗した場あたりのなものではなくて、じゅんすいなアカデミシアン
の興味から出發したものであることを、まず深く印象づけた。これにつづいた伴は、もちまえの一本氣と、学生
とは思われぬ腹の太さと、底しれぬねばりとで、どこまでも押しまくったのである。このふたりの努力がなかつ
たら、われわれは、滿洲にわたることさえできなかったにちがいない。どういふ運命であつたのか、このふたり
の先發隊員が、太平洋戦争の犠牲となつて、つづいて南方の戦線に消えていったいま、こうして原稿用紙をまえ
に記録をくつてゆくと、いつとはなくペンのはこびのにぶるのをおぼえる。

具体的交渉の第一歩をふみだした伴に、まず治安部からしめされた案は、費用約一万円、行程ハイラル―三河
間という、およそばかけたものであつた。いまから考えると、紹介者藤村さんの顔を立てる以外には意味のな
い、とおまわしの拒否であつたろう。三河以北の國境地帯への立ち入りには、強い反対があつた。失敗の場合の
めいわくと、機密保持とのためであつたろう。伴は、眞向からこれに抵抗した。自身で、奉天、ハイラル、ドラ
ガチェンカにまで足をのばし、長春では連日各方面をたずねて、しだいに情報をあつめ、計画の基礎を確実にし
ていった。長春でも、滿洲軍・閩東軍・測量隊・滿洲航空・現地の特務機関などのあいだの連絡は、この地方の
知識に関するかぎり、かならずしも充分ではなかつたから、伴の努力は、しだいに当局者をおしふせていった。
最初にたずさえていった計画案が拒否されると、あたらしい知識をくわえたつぎの案を、それがまた拒否される
とつぎの案を、かれは矢つぎばやに提出していった。実行された最後案までに、一と月あまりの期間で、日記にの
こつていただけでじつに一三の計画が提出されている。お役所しごとの常として、それぞれの計画書は、趣旨・
目的からはじまって、編成・予算・日程におよぶ、ぼう大な内容を必要とする。どんな山があり河があるかわか
らない土地の旅行でも、何月何日どこ出發どこ着という、くわしい日程表をつけないければならないのである。伴

は、徹夜に徹夜をかさねて、これをやつてのけた。そのはげしさは、四月中旬になって、箕村が健康を害して内地にかえらなければならぬほどであった。

川喜田が、箕村にかわつた。そして、伴の手のおよばなかつた黒河に往復して、アムール方面の情勢のニュースをくわえた。そして、四月二三日には、藤田・江原が長春に増強され、あくる二三日、とうとう最後案が治安部に承認された。熱心と純情との勝利であった。可兒さんと伴の熱意は、すでに各方面に、心からの援助者をつくっていた。なかでも、当面の係りであつた酒井政好上尉に負うところは、もっとも大きかつた。そのほかおなじく八木少校、関東軍の松平中佐などの名を、しるさずにおくわけにはゆかない。あとにのべる出先きのひとびととともに、われわれの計画をよく理解し、價値をみとめられた、これらの軍人たちに出あうことができたのは、このうえもない幸運だつたといえよう。

われわれの第一案は、三河からガン河をさかのぼつて、モーホに達する本隊と、モーホから途中まで出むかえる支援隊との二本だての計画であつた。第四―七案のころには、これでもなお、輸送困難という見とおしのもとに、ガン河上流まで本隊をおくりとどける、もうひとつの支援隊がふくまれていた。しかし、さいごに、航空写真測量の結果が判明して、ルートに関する不安がなくなるとともに、もとの二隊編成が確定した。そのかわりにガン河上流から、本隊とわかれて白色地帯を突破する一隊がもうけられたことは、すでにのべた。それぞれの隊には、本隊・漠河隊・支隊のよび名があたえられ、三隊のおちあうアルベジハ上流の地点は、基地とよばれることになつた。

計画の本ぎまりと同時に、先發隊員たちは、それぞれ準備員として、各地に散らばつていった。四月二五日に川喜田はハイラルをへてドラガチェンカへ、藤田はチチハルをへてハイラルへ、江原は黒河へ、と出發した。江

原は、のちに黒河からモーホへと飛行機でとんだ。黒河では、さきに川喜田が偶然汽車にのりあわせた縁から、黒河の豪商として有名な熊沢号の当主、熊沢眞澄氏に、ひじょうな御厄介になることとなった。熊沢さんの先代は、北満から対岸のブラゴエシチェンスタにかけて、縦横に活躍した先駆者であって、いまの熊沢氏は、黒河の町でうまれた、ただひとりの日本人なのであった。先代とともに、おそらく何度かは銃丸の下をくぐってきたであろう、男まさりの先代夫人——といってもまったくおだやかな老婦人なのであるが——は、なお健在で、子どものような隊員たちを、なにくれとなく世話してくださったばかりでなく、熊沢号母子の実力は、漠河隊の準備のために、ひじょうな力となったのである。

ハイラルにあって、本隊の器具・食糧いっさいの準備をととのえる任務をもっていた藤田も、また、最上のめぐまれた環境にあった。そのころハイラルにあったモンゴル人の部隊——満洲國第一〇軍——の顧問であった、西岡中佐の公館が、かれの事務所であり、親もとであった。西岡さんは、参謀などにありがちな政治家氣どりのない、淡泊な、ほんとうに軍人らしい軍人だった。ちょうどわたくしたちくらいの子どもたちを、東京において学生生活をさせ、さびしくくらししておられた西岡さん夫妻に、藤田は、子どものようにかわいがられていた。朝は、顧問の乗用車に同乗して、軍管区司令部にてゆき、酒保の商人を相手に買いいれの交渉をやる。家にかえれば、食事から入浴まで、「うちの息子」が一しょでなくてはいけない。これでは、準備のスムーズにはこぼないはずがない。軍から借りた衣服のうち、戦闘帽はいちばんきらわれて、ドラガチェンカを出発して数日のうちに、わたくしたちの頭からきえうせてしまったが、藤田だけは、西岡さんからゆすられた歴戦の戦闘帽を、しまいまでかぶりとおしたのであった。

これにくらべて、最前線のドラガチェンカの準備をひきうけた川喜田の生活は、焦燥と混乱との毎日であっ

た。川喜田の任務は、人夫・通訳・案内者・馬の手配という、もっともやっかいな部分だった。とおくはなれたドラガチェンカへは、刻々かわってゆく計画の内容のつたわってくるのがおそかった。満洲航空の水系図も、川喜田の出発にはまにあわなかった。この、あまいな条件のもとで、費用を超過させないように、すべての手配をおえることは、たとえ川喜田以外のたれがやったとしても、はじめからむりな相談であった。そのうえ、ハイラルの特務機関長菅波さんの、理解ある好意的なとりはからいに反して、三河の機関長蟹江少佐は、まったく消極的であった。とくに、白系ロシア人の人夫をつかうことには、いろいろな点で不賛成だった。くりかえしていったように、これは、成功のためのキイ・ポイントのひとつであったにもかかわらず……。

濃厚飼料をもってゆかないという方針についても、反対の声ばかりが強かった。馬の数と馬糧の量と、その馬糧をこぶ馬と、そのまた馬の馬糧と、うすぐらい宿舍の灯のしたで、川喜田は、いくたびもえんびつとノートをなげだしては、この悪循環の計算にゆううつになった。ようやくロシア人をつかうことは許可されたが、人夫と馬とはやくからドラガチェンカにあつめて、ゆっくりと選抜することはできなかった。日本の概念からいえば、おそろしく速くはなれたところに散らばっている村々から集まってきた人と馬との、滞在費をしはらう金がなかったのである。いまや、殺人的にいそがしい、春の農繁期がはじまりかけていた。農民たちは、人夫にでたり、馬を提供することを承知するだろうか。そのためにはどのくらいの賃銀がいるだろうか。なによりもまず、かれらと馬との能力は、われわれの期待にそうだろうか。不安といらだちとおそわれながらも、川喜田は、しんぼうよく待っていた。そして、本隊のドラガチェンカ到着の二日まえ、五月一〇日になって、はじめてロシア人あつめに着手した。あとは、運を天にまかせて。

コサックの部落長をアタマンという。アタマンのうえに、ひとりのスタニーク総アタマンがいて、三河のロシア部落全

部をひきいてゐる。戦時には隊長となる地位である。スタニーツ・アタマンを通じて指令を發すると、一日にはぞくぞくと人馬があつまつてきた。人夫一八人と馬二八頭のうち、八人・二五頭だけがのこされた。人夫賃、食費、馬の借り上げ賃、馬の死んだときの補償金、賃銀の支はらい方法などをきめるには、二日かかった。人夫はともかくとして、馬のほうは、馬体検査に立ちあつた獣医の意見では、おそるべき駄馬ぞろいだということ、なにも知らない川喜田の氣をもませた。この「おそるべき駄馬」どもの發揮した、おそるべきねばりが、この探檢を成功にみちびこうとは、たぶん、立ちあいのだれひとりとして予想していなかつたのだ。オロチョンとダフルおのおのひとりずつの案内人も、菅波さんと、滿洲畜産会社の松下さんとはからいで、ドラガチェンカに着いた。本隊の着くはずの日の午後になつて、ようやく川喜田の惡戰苦闘はおわつた。ちょうど二週間のたかひであつた。

内地では、いくらか特權階級的な威力をもつた学生服と角帽も、國境の町では、たいしたねうちはなかつた。いくら上級官庁からの公文書はあつたにしても、孤立無援の貧弱な学生ひとりでは、あとにつづいてくる本隊さえも、とかく貧弱な心ぼそいものと思われがちであつた。それだけに、トラック二台に人と荷物とをつみあげた本隊が、夕ぐれのドラガチェンカにのりこんできたときの川喜田の得意は、想像にあまりがある。いつのまにか学生服からおしきせの隊員服にきかえ、護身用のモーゼルを腰につけて、さつそうとわたくしたちを案内してゆかかれのすがたには、もう不安と焦燥との影さえものこつてはいなかつた。(以上四節 吉良)

二、

ガ

ン

河

一九四二年の五月一二日、われわれをのせた二台のトラックは、早朝のハイラルの町の大通りに黄塵をのこしながら、北にむかって走りはじめた。ハイラル河に面した岩山には、あちこちに銃眼のぞき、急斜面をのぼりつめてホロンバイルの平原にでる峯通しには、戦車よけの防壁がえんえんとつづいて、丘のむこうに消えてゆく。このかんたんな防衛線は、大興安嶺から西にある、そのころの第一線陣地の一部であった。検問所をとおりぬけると、最前線をこえて、軍事的な真空地帯にでたという心安さが、われわれの氣もちをかるくした。ここからアムールの江岸までゆこうとする探検隊の道の支配者は、関東軍ではなくて、自然である。

トラックの行くさきは、ドラガチェンカの部落である。本来のモンゴリア名をナラムトというこの部落は、いわゆる三河地方の中心地である。三河という名は、大興安嶺から西南に流れだして、ここで一せいにアルゲン河にそそぐ三つの河——ガン、デルブル、ハウル——からきたロシア名 Trechreche の直訳である。そのうちの最大の流れ根河を、われわれは大興安嶺の中央部へのルートにえらんだのである。

自然地理的にいうならば、三河は、シベリア的世界とモンゴリア的世界との境にあたる。トラックはハイラルをでてから、ひねもす茫々とした草原を走った。大洋のうねりにいたホロンバイルの高原は、みわたすかぎり黄いろい枯れ野であった。冬ごもりにすすけたモンゴル人の包も、とおくにみうけられた。しかし、小半目を走ったころから、平原のなかに、もはやうねりとはいえない、風波のような形の小さな丘が、ポツポツとすがたをみせはじめ、しだいに密度をましてくる。ちょうど、國境をこえて吹いてくる北風のおこした波のように、この丘

どもはみな、その急斜面を南に、ゆるやかな斜面を北に向けてならんでいた。のちになってしだいにわかってきたように、これらの丘は、その特徴のある地形をもふくめて、まさしく、大興安嶺山地の前ぶれであった。夕ぐれちかく、車がガン河の谷に達したころには、丘は、もはや山といえるほどの大きさにまで成長していた。そして、なによりもめだつたのは、その丘の尾根すじに、一列にならんだ立木のすがたが見えはじめたことである。車がすすむにつれて、一列横隊にならんでいるようにみえたのは、じつは、丘の北斜面にひとかたまりをなしたシラカンベの林が、顔をのぞかせていたのだということがわかってきた。このシラカンベの林は、針葉樹の密林におおわれたシベリア的世界が、数日行程の北にせまってきたのものがたっているのである。

森林から草原へのうつりめにくりひろげられる、草原のなかにまだらに森林をおりませた、こういう公園的な景観を、地理学者は、森林ステップなどとよんでいる。ドラガチェンカは、シラカンベの森林ステップの一端、ひくい丘にとりかこまれた、デルブル河流域の谷に位していた。

森林と草原、濕潤氣候と乾燥氣候とのあいだにはさまった、森林ステップの土は、まっ黒のふかい黒土である。ヨーロッパの穀倉ウクライナから、ウラルをこえて東にのびた黒土地帯は、西シベリアから東シベリアへ、しだいにせまく、ついにはちぎれちぎれとなりながらも、中央アジアの草原とシベリアの森林との境をぬらうて、アジアの穀倉満洲にまでつながっている。ロシア人によるシベリアの農業開拓は、この黒土帯をつたって、東へ東へと、アムールの谷にまでのびてきた。そして、一九一七年の革命が、ザバイカルの農民たちに、おもいきって國境をこえて満洲に移住するきっかけをあたえた。人口六十七万をもち、酪農経営をもってうたわれていた三河は、こうしてできた。こうかんがえてみれば、三河のロシア人部落とは、西洋文化の田舎くさい片端が、國境をこえて顔をのぞかせているのにすぎないのだが、集約なアジア的穀作農業の世界では、その半農半牧の生活が、

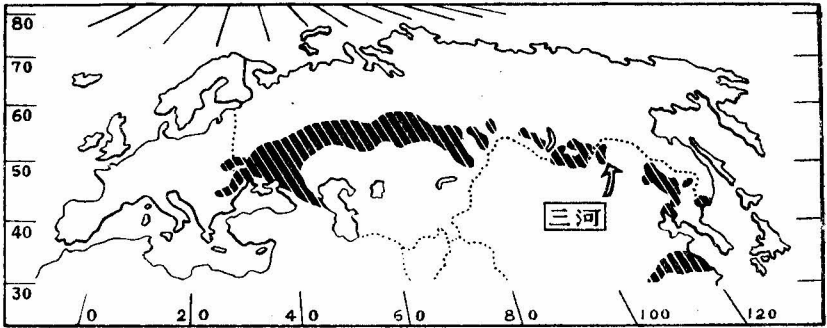


図 3. ヨーロッパとアジアをつなぐ黒土の帯 (Huntington 1940 による)。

いかにもたのしい合理的なもののようにみえることは、否定できない。三河の生活が、満洲の日本人のあいだにもてはやされたゆえんであろう。

ステップの部落は、水のあるところにできる。ドラガチェンカの町のまんなかには、おおきな泉があって、水くみでにぎわっていた。このあたりを町の中心にして、れんがづくりの役所や商社のたてもの、丸太組みのロシア風の農家が、まばらに立ちならび、ゆきちがう顔つきの雑多な人間が國境の町らしいふんいきをふりまいた。役所の筆頭は旗公署で、旗という政治単位といい、旗長がモンゴル人であることといい、この三河地方が、ロシア人の侵入以前には、モンゴル人の生活空間であったことをものがたっている。しかし、いまでは、ときおり町の大通りを駆けぬけてゆく、とんがり帽子のプリアート・モンゴルが眼をひくくらいで、モンゴル人の数はごくすくない。このプリアートそのものも、移住者で、ロシア人の放牧家畜の番人をつとめているにすぎない。モンゴル人の旗長とは名ばかりで、実権は日本人である参事官の手ににぎられ、さらにその黒幕として、特務機関が隠然たる勢力をもっていた。町はずれには、わずかながら、日本軍も駐屯していた。

住民の主体は、もちろん白系のロシア人で、名にしおうコサックの後裔である。ちいさい子どもでさえ、疾風のように馬を駆って、通りをかけぬ

けてゆく。到着のあくる日、旗公署まえの廣場には、やとい入れた馬夫や車夫たちがあつまってきた。隊長の訓示は、いちいちロシア語とシナ語とに通訳される。初対面の八人のコサックの馬夫は、なかなかたのもしそうな大男ぞろいで、なかには鼻の頭までひげを生やしているのもいた。部落は、ドラガチェンカ、ボクロフカ、トロントイ、ラブダリンの四つ、二九歳から四五歳までのはたらきざかりである。一八人のなかから、狩りや釣りなど山あるきの好きなのがえらばれたそう、いまから釣り竿をぶらさげているのもあった。こういう連中を相手に、ぼう大な荷物を駄載用にしわせるため、われわれは、へとへとになるまではたらいだ。

ひるめしはシナ人の店にでかけた。表通りには、型のとおり紙ののきかざりをぶらさげた、そういう店がいくつもある。実質的で万人むきのうまい料理をくわせてくれる、シナ料理屋の進出は、どこへいっても、フロンティアの町の發展のために、欠くべからざる条件となっているようだ。ほんとうは三河では、シナ人は、表むきの居住権をあたえられていないで、配給制度の時代に、配給の籍さえもっていないのであった。しかしそれでもかれらは進出してきた。日本人の商社の使用人にも、とおくのシラカンバ林から薪をはこぶ馬車屋にも、野采つくりの小百姓にも、そして、なかんずく、こうした飲食店や雑貨商にと。あらゆる生活のチャンスに食いきり、なんでもうまくて安いものを食い、どこにでも住もうとするのだ。それにくらべて、日本人たちは、このフロンティアにおいてさえ、やはり、まずいたくあんやシラミだらけのたたみの上から、はなれることができないでいる。われわれのはいった料理屋も、じつは、日本人官吏のすむ寮の、まずい麦飯とつけものに閉口した先発隊員の川喜田が、しばしば逃避していた店なのであった。

いろいろの方角から、フロンティアの町さしてあつまってきた、種々雑多な民族が、それを利用する。もちろん、われわれ自身がそうだし、われわれがそろって餃子ギョウザなどを食っていると、異様ないでたちの二人づれがはい

ってきた。白っぽい、あらくなめした皮の服にもひき、モンゴル帽に黒い帯といういでたちで、半月ばかりまえからこの町に滞在している川喜田の顔を見ると、パッと氣をつけの姿勢になって敬礼した。これが、あすからわれわれの案内人になるはずの、ガイブシャンとトクンボとであった。

トクンボのほうは、モンゴル系の少数民族ダフル族にぞくし、同族のおおくがそうであるように、毛皮そのほかのいわゆる「山貨」の仲買人として、たえずオロチョンに接してきた。オロチョンたちに対する政治工作の意味をかねた独占商社、満洲畜産会社というものができてからは、かれはその一員としてはたらき、ガン河の大支流トゥラ河の中流にあるシュリカンの交易地で、ほとんどオロチョンの一員のようにくらしているということであった。みなりもすっかりオロチョン風である。ガイブシャンのほうは、トゥラ河のオロチョンの一員で、中肉中背のしまった体に、あかいほほの好青年だった。これにひきかえ、トクンボは、大兵肥満の白髪まじり、みからに人目をひいた。こういう連中が町をあるいていても、いっこう異様におもわれないうところが、フロンティアの町の性格なのであろう。われわれの隊が、日本、シナ、ロシア、オロチョン、ダフルの五族混成隊となつたのも、ふしぎではない。そもそも満洲そのものが、シベリアのタイガとモンゴリアのステップと、北シナのサバンナと朝鮮の落葉樹林と、ちがったいくつもの世界がひとつにおちあう、一大フロンティアにほかならないからである。満洲國は、五族協和をその理想にかかっていた。はからずも、ひとつの小満洲となったこの隊は、はたして大興安嶺の自然のなかによく人の和をたもって、成功をおさめることができるだろうか。

出 発



図4. ドラガチェンカ出発.

五月一四日の朝、一行は町のひろ場にならんで、壯行の式にのぞんだ。隊員一三人、ロシア人の馬夫八人、シナ人の車夫二人、案内二人、駄馬二九頭、馬車五台の大部隊が、ズラリとならんだのをながめて、われわれは、すっかりいい気もちになった。午前一〇時、隊長の元氣なあいさつがおわると、ながい隊列は、馬車を先頭に、砂ぼこりを巻いて、ドラガチェンカの街路にながれた。

あかい屋根をちりばめたドラガチェンカの町がうしろに遠ざかって、道は東南にむかって、ガン河の谷へとこえる。両がわには枯れ野におおわれた丘がゆるやかにつらなり、はるかの尾根すじには、ノロとおぼしい白い点が、いくつか草を喰んでいた。風はつめたいが、空はカラリと晴れて、日ざしはとみに春めかしかった。隊列のうしろのほうでは、まいあがるヒバリをねらって、のどかに銃声がひびく。いよいよ隊は本来の活動をはじめていた。足にものをいわせて、あるきだしさえすれば、もうこちらのものだ。計画をはじめてから半年ばかり、そのあいだの忍耐といらだち、ここにここ半月のあいだのこみいった準備と計理、連日の睡眠不足の、なんとゆううつであったことよ。年のはじめから新

ちょうどこの泉のそばには、牛車敷台に荷をつんだ、シナ人の賣買家の一行が休んでいたが、かれらも、風よけにモンゴル・テントをはって、しごくのんびりとお茶をのんでいた。たぶん、こういう打ってつけの休み場にき



図 5. 泉のほとりの雪田、手前の湧き口のまわりでは、土のかたまりがおしあげられ、その下に青い氷がのぞいている。

京にがんばって、計画推進の原動力となった先発隊員伴などは、もう二ヶ月あまりも、まともに睡眠をとっていないのであった。ふくさつなお役所しごとの網のなかを、うらおもてのない学生計画がおよぎぬけるためには、

ただ馬力だけがたよりであったのだ。しかし、それもみなすぎさった。とうとうわれわれは解放された。探検そのものの成功にたいしては、なんの不安もなかった。この不敵な自信のあるかぎり、われわれは、なんの心おきもなく、大陸の北風のなかを、胸を張ってかけまわることができた。

ガン河の谷へのひくい峠をこえてまもなく、道ばたにわきでた泉のほとりで、最初のひるやすみをとった。三〇頭の馬の荷をおろし、馬夫がひるめしをすませて、また馱載をおわるには、たっぷり二時間かかることがわかった。二人ずつ交代で、馱馬隊の監督と氣象観測とをうけもつことになった日直の隊員は、なれないしごとにもごつきながら、しきりにさいそくしているが、馬夫たちは、あわてずさわがず、ゆうゆうとしているようにみえた。

たら、牛馬の荷をおろしていたわってやり、人間はゆっくり休んでゆくのが、大陸の旅の作法なのであろう。

泉のほとりには、どういふ原因によってできたのか、かなりのひろさの雪田がのこっており、おりからこな雪が西北の風に舞って、うすら寒かった。しかし、ガン河の谷は、ドラガチェンカの盆地にくらべて、春のおとすらがはやく、野火でやけた草原には、いちめんにみじかい青草がもえはじめ、そのうえに咲いたオキナグサが、春の花にさきがけて、野づらを一面に紫いろにそめていた。日本のオキナグサとちがって、十数本も一株からむらかった花は、あかるくパツと空をむいてひらく。近よってみるとおなじ紫にも濃淡さまざまの色あいがあり、黄いろいものもめずらしくないが、遠ざかるにつれて、しだいにほのぼのとした紫ひといろにとけあい、谷間をうすめつくしていた。そのじゅうたんのひろがりを追うて、眼を山腹にあげてゆくと、北斜面にはえたシラカンバの木立ちが、いぶし銀の色にかがやいている。それは、旅のプロローグにふさわしい豪華ななごめであった。

第一夜のやどりに予定していたボクログカの村までは、とてもゆけそうもないので、ひとつ手まえの部落ウストクリーに宿泊の準備をつたえるため、馬夫のひとりをも馬で先行させた。そのあとをおうて、われわれもほどなく村にはいる。時刻はもう七時ちかいが、まだ夕日があかあかとさして、放牧からかえる黒いヒツジの群れが、草原にながく影をひいた。ひろい家畜のかこい場と農家のたてものが、かわるがわるにならんだ村の大通りを、赤いまだらの牛がひとりであるいてゆく。われわれも、とあるかこい場のなかに荷をおろした。でむかえた村長は、まだわかい青年だった。武装した多人数の隊のとつぜんの宿泊は、きつとめいわくだったのだから、かれの應對ぶりは、しぶりがちにみえた。それがこちらの氣分に反映して、なんとなく対抗意識がおこるのは、きつと旅立ちの昂奮のせいだったのだから。まもなく、隊員は、三・四人ずつ農家に分宿させてもらうことに、話がまとまった。

話にはきいていたが、ロシアふうの丸太づくりの家にはいるのははじめてであった。まっ白にぬりこめた壁、みがきあげたがんにょうな板張りの床、ペチカ、サモワール、壁の聖像とニコライ二世の肖像、なにもかも話にきいたとおりだった。二重窓の窓ぎわにいくつもならべた鉢植えには、われわれには何の変哲もないミカンの類もまじっていた。五月中旬というのに、ペチカにあたためられた室内で、そのつやつやした葉をながめていると北國のひとびとの宿命的な南へのあこがれが、いくぶんかは理解できるような気がした。折も折、この日は、春のはじまりをつげる降誕祭にあたっていた。そのせいでもあろうか、晴れ着をきた娘たちの手で、なかなかのこちそうがはこばれてきた。さそわれるままに、祭の夜のおどり場もおとすれてみた。つめたい風のふく暗い通りをグルグルまわって、方角もわからなくなったころ、とびらをおして段をくだった、半地下室のような、天井のひくいせまい部屋だった。この部落には娘がすくないので、事のあるときには、よそから借りてくるのだというが、かなりの数の青年男女があつまっていた。もうもうとした煙草のけむりのなかに、バラライカが鳴っていた。もしわれわれがいっしょにおどれたら、どんなにかたのしいおもいでもなっただろうに、戦争の申し子のよくな藝なしの日本の青年たちは、座の白けるのを氣にして、早々にひきあげてこなければならなかった。

最初のキャンプ

おきでてみると、娘たちは、よごれたふだん着にきかえてはたらいっていた。パンとミルクいりの茶ばかりの朝飯をたべているかとおもうと、口をモグモグさせながら立ちあがって、牛の手入れにゆく。食事をするというところが、なにか人にみられてははすかしいことのような、日本人の作法は、どうしてできたものなのか、とにかく



図 6. ウスト・クリーから、ステップのなかをポクロフカへ。

それは、みるからに氣もちがよく活動的であった。

ズボン、むちをもった一人まえのスタイルがとてもかわい。村をとりまく放牧地をぬけると、こんどは丘の斜面にポツポツとたんざく形の畑があらわれた。だがやしてムギをまいたばかりの黒々としたのもあれば、休閑地

この朝は、馬夫のしたくがおもったよりもはやくて、こちらがせきたてられるかたちになった。ポクロフカに通じる道は、ゆるやかな皿型をした、ガン河の枝谷をのぼっている。なめたようにみじかく草のくいつめられた放牧地に、オキナグサがあいかわらすきれいに咲いている。出發したばかりで元氣いっぱい馬どもは、このきもちのよい朝に、なにが氣にくわないのかしきりとあばれて荷物をふりおとした。取扱い注意の眞空管の箱を、ゴロゴロとひきずって走られては、みているほうの命がちぢまる。鞍下には、麻袋マサイをなん枚もぬいあわせたものをしき、鞍のうえから荷物をふりわけにして、そのうえからロープでしめつけてあるので、一度荷物をおとすと、つみなおしには、すいぶん時間がかかる。そのたびに隊列はとまって待たなければならぬ。そのひまをみつめて、われわれは、おもいおもいに隊列をはなれてあるきまわった。放牧のヒツジの群れをおいかけてゆくと、ひょっこり十くらいの牧童にであったりする。金線いりのコサック帽に乗馬

らしいのもあった。枯れ野のなかに、あちらにひとつこちらにひとつ、畑のちらばっているのが、われわれにはとんでもない粗放な農業にみえる。傾斜地をえらんでいるのは、春さきの気温の逆轉のために、霜の害をうける危険がすくないからであろう。

谷のつまりの峠からは、ガン河の谷がひろびろとみわたされた。ガン河の流れは、大小無数の分流や三日月沼を両がわにひきいて、はば数キロもある谷のなかを、かってきままに蛇行している。流れに沿って、数十メートル以上のはばにあげた、ドロヤナギの河辺林は、みわたしたところほとんど樹木のない山野のなかに、いちじるしいコントラストをなしていた。河上には、左岸からそそぐ大支流トゥラ河の合流点にあたるキャラバ山がはるかにかすんでいた。われわれの眼は、まだ、スケイルのおおきな、つかみどころのない風景になれていない。いったい、あそこまで何日たったらゆきつけることやら。双眼鏡のレンズにうつるキャラバ山にも、まだ森林らしい森林はないようにみえた。大興安嶺の樹海はどこにあるのだろうか。われわれは、なんだか心ぼそくなってきた。

ポクロフカで晝食をすませて、いざ出発というとき、ちょっとしたトラブルがおこった。馬夫のひとりがないのだ。馬がにげて、つかまらないのだという。その男は、この部落のもので、名まえをグラモースキーといった。かれは四五歳の年かさで、まえにガン河の中流まで魚釣りにいったことがあり、また日本に観光にきたこともあるというので、われわれははじめおおいに重きをおいていた。しかし、かれの不注意から、たっぷり二時間ちかくを浪費したおかげで、グラモースキーはだいぶん信用をなくした。けれども、このできごとが、以後二ヶ月のあいだもてあましたグラモースキーとのくされ縁の、そもその皮切りであろうとは、さすがに知るすべもなかった。

ポクロフカの部落は、ガン河の谷の両側の山すそに發達した段丘のうえにある。村はずれには、玉ねぎ形の塔をいただいた、ロシア風の教会がたっている。道は教会のまえで、この段丘をおりて、まったいらな沖積原にはいった。枯れ草のたけから察するに、夏は膝を没する草むらであろう。夏には、おそらく半湿地だろうとおもわれる低みも、土地はよくかわいて、荷を満載した馬車のわだちも、深くはめりこまない。この、雪どけと夏の雨とのあいだの乾燥季こそ、われわれの計画のはじめいらいねらってきたものであった。ながい検討のすえにきめられた行動開始の時期五月の、予想どおりの状態に満足して、われわれは三々五々馬車に腰をかけ、にぶい振動に身をまかせていった。

人里では案内人も用はない。大兵肥満のトクンボは、あるくのがいやとみえて、つれてきた貧相な馬にのっているが、いまにも馬のほうがつぶれそうだ。ガイブシャンは、ひるめしの休みに、しきりと、あてがわれた騎兵銃の試射と照準なおしをやっていたが、さすがにボカンと馬車にこしかけているようにみえて、とおくにいるノロのすがたをみおとさなかった。有望とみとると、遠くの丘に白い点としかみえないうちに、まっしぐらにとびだしてゆく。われわれの距離の目測は、まだなれていないとみえて、はるか遠方とおもった丘は、あんがい近かった。風しもをまわった黒い豆粒が近づくとみると、パッとノロの白い尻がひるがえって、やがてパンパンと無駄弾が風にのってきこえてきた。双眼鏡にうつるノロの走るすがたは、優美そのものようだ。ひらべったく体をのばして、肢はうごいていることを意識させない。沼などは、パッとひととびではねこえる。さんねんながら、この日はまだえものがなかった。

一八時、ガン河の分流にのぞんだ草原に、二本ポツリと独立したドロの大木にちかく、さいしょのキャンプ地をえらんだ。三日月沼としてとりのこされる一步手まえの、流れるともなくよどんだ分流をへだてて向う岸に

は、紫紅色の枝に白粉をおびたエゾヤナギの若木が、うつくしく生えそろっていた。まず、駄馬は荷をおろされ前肢をしばりあわせて、草原にはなされた。テントはあわせて五つ、さしわたし五メートルくらいの八角形の軍用大テントには、荷物と日直とを收容し、緑いろをした四つの小型テントには、隊員が二―三人ずつおさまった。うち、ひとつは隊長テント、ひとつは無電機と大塚技士・郭助手を收容する無電テントである。馬夫たちには、携帯テントをあてがった。テントが立ちならぶと、ロシア人たちの焚火のうえでは、はやくもスープのバケツが煮立ちはじめた。しかし、こちらはそれどころではない。食糧を準備していないシナ人やオロチョンのために、過不足のないよう食糧も配給してやらねばならぬ。けっきょく隊員の食事がいちばんおそくなってしまったのも野営の第一夜にふさわしい。このへんが、われわれの人のよさなのであろう。かわききった流木の山は、はなやかな色のほのおをあげてよくもえた。(以上三節 吉良)

森林ステップの自然誌

あわただしくとおりぬけた三河地方の、早春の自然については、季節の関係もあって、くわしい資料に欠けているが、ざっとスケッチしておく。

ハイラルは、完全にステップ地帯にあって、その郊外から、ガン河に達するまで、まったく一本の樹木もみないことはまえにのべた。ただ、ハイラルの西部にある砂丘のうえに、シベリアアカマツ^①(オウシュウアカマツ)の砂丘林のあるのがめだっている。雨のおおい気候では、砂丘は乾燥環境と考えられるが、乾燥気候では逆に水分に富んだ環境となり、まったく樹木のないステップのなかに、砂丘のうえだけは森林や大形の草本をみるのは、

世界の各地に共通な現象である。ステップ地帯の、密なこまかい土にくらべて、砂丘の砂は、とぼしい雨をよく吸いこみ、しかも、砂粒のすきまは、毛細管として地下水を地表へと吸いあげるには廣すぎるために、地中の水が蒸発によってうしなわれにくいからである。おなじモンゴリアのステップでも、ウジュームチン地方から南の内モンゴリアでは、砂丘のうえにノニレの林をみるが、ホロンバイルや外モンゴリアのチェチュンハン地方などでは、このシベリアアカマツの砂丘林が、ひろく分布している。③ノニレとシベリアアカマツのちがいは、氣候帯でいえば温帯と亜寒帯とにそうとうする、温度条件のちがいを反映しているものとおもわれる。

ハイラルから北には、あまり砂丘はない。三河地方にいたるまでのステップは、ひじょうに一様な暗色栗色土壌の地帯のようにみうけられた。三河が近づいて、丘のうえにシラカンベがみられるようになる、土壌は黒土（チェルノーゼム）とかわり、ガン河下流一帯の森林ステップ地帯をしめている。この黒土地帯の正確なひろがり、は、よくわかっていないらしいが、すくなくとも三河地方のそれは、典型的なチェルノーゼムではないらしく、ときに「三河黒土」、「南方黒土」などともよばれている。④ドラガチェンカの郊外では、黒土に特有な、粒子のこまかい、まっ黒なA₁層が、五〇センチから一メートルにおよび、道路の切り岸にみごとな断面をみせていた。

もちかえった土の標本についてしらべた表土の酸性度は、ハイラル河の段丘上でPH七・〇—六・八、ハイラル、ドラガチェンカのちょうどまんなかで六・九—六・八、ドラガチェンカ郊外で六・八—六・六、ガン河下流トゥラ河合流点附近で六・八—六・四と、規則たらしい推移をみせて高まってゆく。この土壌のうつりかわりに対応する、草原のタイプの変化は、枯れ野のなかでは、まったくとらえることができなかった。

ドラガチェンカへの一日のトラックの旅のあいだ、草原には一めんにおキナグサの類が咲きみだれて、野火にやけた部分では、野づらを紫にぬりつぶしてしまっていたからである。三河では、キタノオキナグサとヒロハオ

キナグサとの二種類が採集され、そのほかわすかに、ヒロハタイゲキ、キジムシロ、フクロヒヨス、ノヤマズゲなどの咲いているのをみた。ドラガチェンカに滞在していた川喜田の観察によると、オキナグサの花は、五月二日ごろから南斜面に咲きはじめ、八日には一せいに咲きそろった。しかし、われわれの着く一二日の朝には、雪がうすく草原を化粧し、一四日のひるにも粉雪がちらついた。日中の最高気温も、まだ一〇度を前後していた。

草原の草だけは、枯れ草から想像して、ひざにとどくらしく、密度も高いようであった。野火でやけてもいないのに、芝生のように草のみじかくなっているところは、部落のちかくにおおく、かなり家畜密度のたかい放牧場であることがわかる。こういうところが、とくにうつくしくオキナグサでかざられているのは、家畜が食わなためであるにそういない。三河地方の草原が、もつと南方のステップにくらべて、より湿った気候のもとにあることは、この季節でも、氣をつけてみるとよくわかる。それは、草原のなかに斑点状にまじっている、高さ三〇—四〇センチの矮少なヤナギのしげみの存在であった。ヤナギの種名はわからないが、すくなくとも二種がある。こういうヤナギの斑点は、とおくからながめると、あきらかに、谷間と北むきの斜面とにおおく分布している。乾燥地帯では、斜面の向きのちがいによるデリケートな地表蒸発量のちがいが、土壤水分の量におおきな影響をあたえるのである。

シラカンバ（ただししくは、日本や東満洲のものとは區別してコウアンシラカンバとよばなくてはならないが）の生えかたも、この原理によく支配されている。蒸発量のおおいは、もちろん南斜面で、西—東—北の順に減少する。したがって、シラカンバは、まず北向き斜面からあらわれ、しだいに北斜面からあふれだして、東—西—南の順に進出してくるのである。ガン河をさかのぼって、トゥラ河の合流点附近にいくと、シラカンバは、ほとんどどの斜面にも、また平地にもあらわれてくるようになる。もつとも、ドラガチェンカ附近でも、ときに南

河 斜面にも生えていることがあるが、それはかならず、涸れ谷の底に一列にならんでおり、しかもよくみると、きつと底から東むきの斜面をすこしあがったところに生えていて、その規則ただしさに、われわれをおどろかせた。

この森林ステップのシラカンベ林について、もうひとつ注目すべきことは、どの林も、わりあい樹齢のそろった木からできていて、若木をほとんどみない現象である。プレチュケは、有名なアンドリュース探検隊のパーキー、モリスの両地質学者にしたがって、これを、氣候の小波動とむすびつけて考えている⁽⁶⁾⁽⁷⁾。乾燥地帯では、年による雨量のちがいがとくにはげしいのであるが、この雨の多少は、数年ないし数十年くらいの週期で、波動的な変化をする場合がおおい。雨のおおい時期には、発芽した種子が順調にそだって、多少の乾燥では枯れない程度にまで根を張ることができるが、雨のすくない時期には、たいてい途中で枯れてしまう。その結果として、森林は、年齢の不連続な樹木から成り、ちょうど雨のすくない時期にみれば、まったく若木がみられないというところになるのである。一般に森林の生育限界では、ぎりぎり一ぱいの条件を中心に氣候が波動しているから、いつもこういう現象の可能性がある。この地方のシラカンベ林は、内陸の乾燥地帯にたいする森林限界をつくっているわけだが、高山の森林限界でも、おなじような現象にぶつかることがまれではないのである。

なお、ことわっておかなくてはならないのは、三河のロシア部落成立以後、森林ステップの樹木がどんどん切られていることで、以上にのべた状態は、すべて現在のものであって、過去の復元状態ではない。

森林ステップの動物界を特徴づける、もっとも大形の獣は、ノロである。ドラガチェンカを出発してすぐに、二頭のノロをみつめたことは、すでにのべた。ひろびろとしたステップにみられる小形の有蹄獣であるから、われわれはすぐに、内モンゴリアからホロンバイル草原地帯にふつうな黄羊^{カウチン} (*Gazella gutturosa*)

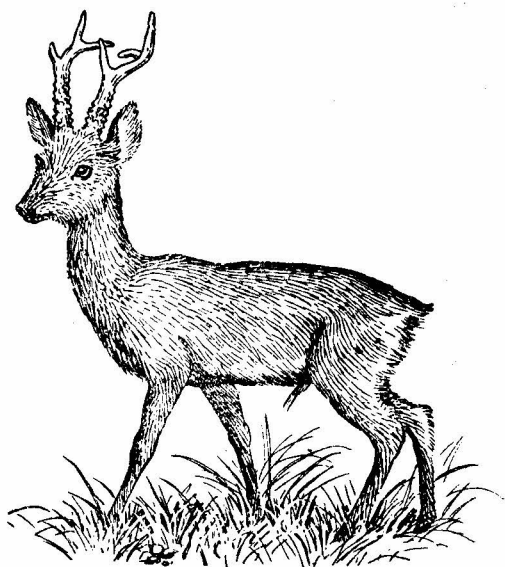


図 7. オオノロ *Capreolus pygargus pygargus* (Pallas).

木のない乾燥度の高い純ステップ地帯の代表的動物であり、後者は、森林への移行地帯である森林ステップに特有な動物群を代表して、おたがいに対抗的非混在的なすみわけをしめている。ふたつの生態学的同位種である。同位種の問題については、ノロとハンドハンとの関係について、のちにもっと具体的にのべることにしよう(一三五—一四三ページ)。

森林ステップの哺乳動物として、もうひとつわれわれの眼をひいたのは、うってかわって、ごく小さな動物であった。ウスト・クリーをでて、ガン河の谷におりてきたとき、谷の沖積原のなかに、無数の土の塚がむらがっているのがみつかつた。直径五〇センチ、高さ三〇—四〇センチのモグラの塚とおもえばまちがいが無い。密

をおもいうかべたのであるが、それはまちがっていた。それは、たしかに、オオノロであった。ドラガチェンカのような、よくひらけた地方で、大部隊がやかましい音をたてて歩きながら、なんどもそのすがたをみうけたのだから、ノロの個体数はそうとうにおおいのであろう。わりあいに、人間の接近にたいして鈍感なもの、眼にふれやすい原因らしいが、こういう点もホワンヤンによくしている。ホワンヤンはヒツジ科に属するカモシカの種類であり、ノロはシカの種類であるが、その生活型も体の大きさもよくにており、前者は、樹

度は、一〇メートル平方に七二個をかぞえ、地下に掘りめぐらされた坑道の網のすばらしさを想像させた。ステップの動物のなかでは、毛皮獣としても有名なタルバガン (*Arctomys sibiricus*) が、やはりこういう塚をつくって群生することが知られている^⑦。しかし、塚をほりかえしてみると、坑道の直径はわずか一〇センチたらずしかなく、体のおおきなタルバガンのものではなかった。この坑道の主は、モグラネズミ *Mysopalax psilurus* なのである。しかし、タルバガンとモグラネズミとは、このように生活型がそっくりであって、どちらも土壌の實質的な占有者であるから、おそらくおなじ地域に共存はゆるされないであろう。モグラネズミの塚は、ウスト・クリーからトゥラ川の合流点までのあいだの、じゅんすいの森林ステップのあいだにのみ発見され、一方すぐ西のバルガ・ステップにはタルバガンがすんでいるのだから、この二種も、やはり森林ステップとステップとを、すみわけているのではなからうか。ほかの資料によっても、モグラネズミは森林ステップ的な場所ばかりに見いだされ、モンゴルの純ステップ地帯にはいないようである。

オキナグサの咲きみだれた草原のうえには、たくさんのヒバリが、春のおとずれをうたっていた。もちかえった標本は、ホクマンチュウヒバリと同定された。ヒバリのさえずっている高さの一段とうえには、白黒まだらの中形の猛禽が、ゆうゆうと弧をえがいてとんでいた。マダラチュウヒである。この鳥は、草原の鳥類社会の王者であるらしく、ガン河をさかのぼって森林地帯にはいっても、ひろい草原のあるところには、きままってその氣品のあるすがたをあらわした。(吉良・梅棹)

〔註〕

- ① *Pinus sibirica* Linn. に属する二葉松をさす。竹内亮(一九四二)は、滿洲に産するものを、*var. sibirica* Komarov シベリアアカマツとしているが、北川政夫(一九三九)は変種をみとめず、オウシユウアカマツの名のもとに、滿洲産全部を

統一している。なお、ハイラル附近の砂丘産のものに対しては、*var. mongolica* Liternoff 'モウロンカレン' *Pinus Yamsultai* Deki ハイラルマツなどの異名がある。

② 今西錦司 (一九四〇) 森林樹種の分布。木原均編、内蒙古の生物学的調査 (東京、養賢堂)、七五—八四ページ。

③ Paetschke, B. (1939) *Landschaftskundliche Wesenzüge der östlichen Gobi*. Wiss. Veröffl. Deutsch. Mus.-Länderk., Neue Folge 7: 103-148.

④ 川瀬金次郎ほか三名 (一九四二) 興安北省土壤調査報告。興安北省資源調査報告書、上巻 (興安局・大陸科学院)、四二—四一ページ。

⑤ Paetschke, B. (1937) *Das Bergland der nordwestlichen Mandschurei*. Peterm. Mitt. Ergänzungsheft 232. S. 68.

⑥ 浅井辰郎 (一九四〇) 氣候と水。内蒙古の生物学的調査 (前出)、四二—五九ページ。

⑦ ルカシキン (一九三九) 北満野生哺乳類誌。北満経済調査所、三五二ページ。なおアンドリュース・内山賢次訳 (一九四一) 蒙古平原を横ぎる (東京、育成社弘道閣)、一二三—一三〇ページにも、ゲイゲイッドなタルバガンの生活の描写がある。

さいこの部落

あくる日も快晴であけた。あいかわらず、だだっぴろい沖積原をゆく。このあたりでは、対岸の山すそから、こちらの山脚まで、谷のはばは、四—五キロもあろうか。沖積原をつきつてゆくと、左がわの流れによったほらからは、ふるい河すじに水をたたえた三日月沼や、分流、濕地などが、つきつきとあらわれては、迂回を強いた。右手の山ぎわには、ところどころ玄武岩の崖があらわれて、まばらにシラカンベが生えていた。はるかむこう岸にも、おなじような崖がみえることから考えると、極端に蛇行したガン河の本流が、山すそをけすってできたものである。したがって、崖のまぎわには、まだ分流ののこっていることがあり、そんなときには、みわた

すかぎりのひろい谷の平地があるというのに、わざわざ崖と流れとはさまれた、せまい斜面をとおらなければならなかった。



図 8. ガン河の左岸にみられた玄武岩の露頭。斜面は北を向いているので、シラカンバがまばらに生えはじめています。

このあたりの沖積原は、いくつかのちがった景觀要素からできている。まず、本流の両がわには、河辺林の帯がある。蛇行する流れの屈曲部を、外切線でつらねた帯状の地域を、蛇行帯というが、河辺林のあるのは、この蛇行帯の範囲にかぎられている。蛇行帯のまばらさは、このあたりでは数百メートルにも達するであろう。まだ、ほとんど森林らしいものないこのあたりで、河ぶちだけに森林のあるのは、もちろん河から供給される水湿のおかげであるが、したがって、大木のあるのは、減水期にもたえず流れのある水路に近い部分にかぎられている。河辺林をつくる木で大木になるのは、ドロノキ（コウアンドロ）とケシヨウヤナギとであって、りっぱな林は、たいてい、本流から数十メートルくらいの距離以内にかぎられていた。ほそ

い分流や三日月沼のほとりは、おもに灌木性のヤナギや、ナギ、タイリクキヌヤナギなどの小喬木でふちどられている。色とりどりのニスをかけたように、ツヤツヤした

ヤナギの枝は、ちょうど一せいに花をつけて、黄緑色の雲のようにうつくしかった。

本流ぞいの喬木林のうしろ、分流と沼との迷路のようにいりまじった地帯は、南の國からかえてきたばかりの、水鳥どもの世界であった。いく種類ものカモ（マガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、オナガガモ、シマアジ、ホシロガモ、ミコアイサなど）の群れが、ヤナギにかこまれたしずかな水面に、ことしの子どもをそだてるための、活潑なひとみをはじめていた。きりとった灌木の枝を、胴乱につめこんでいると、カモの群れにしのびよっている今西隊長や梅棹の銃声が、湿地をわたってひびいてきた。

湿地といえば、われわれのゆくての最大の敵のひとつ、野地坊主の湿地も、すでにあらわれてきていた。沼のほとりや、なかばうすめられたふるい河道・三日月沼のなかに、あの不気味な坊主あたまが、野火に枯れ葉をやかれて、くろぐろとならんでいた。野地坊主というのは、北國の湿地に特有な、スゲ、ワタスゲの株が数十センチもの高さのびあがったもので、湿地のなかに密生して、あいだに水をたたえている。馬車や馬にとって、この湿地ほどこわいものはない。われわれは、一九三九年の小興安嶺遠征隊の記録映画から、すでにそのおそろしさを頭にたたきこまれていた。野地坊主のあたまをながめてみると、そのあいだにはまりこんでもがく馬のフィルムが、まさまざと眼にうかんできた。しかし、このあたりでは、野地坊主は、まだごく一部分の低地にかぎられており、行進のさまたげにはならなかった。

喬木林・灌木林・湿地とならんだ河ぞいの地帯をのぞけば、まだ谷は一めんの草原である。よくみると、草原のなかには、ドラガチェンカいらいひきつづきのステップと、ほとんどイワノガリヤスばかりの部分とがある。イワノガリヤスは、夏には脊たけちかい高さにしげり、ススキにた赤い穂を一めんに風になびかせるのであるが、いまはただ黄一色の枯れ野であった。ステップの部分にくらべると、イワノガリヤスの部分は、土地がすこ

河 しひくい。たぶん大水のときには、この部分までが水びたしとなり、夏のあいだは半湿地となるのであろう。草原には、あいかわらずノロのすがたをみうけ、また空には、例のマダラチュウヒが、きまってゆうゆうと弧をえがいていた。

おりから、ゆくてに野火の煙があがった。野火は北満の春の景物である。興安嶺を汽車で西にこえてから、野火の煙をみない日はなかったが、この日はとくに近かった。一列にならんだほのおの線が、音をたててみるみる近づいてきた。深い枯れ草に火がうつると、ほのおは数メートルの高さにもえあがる。馬は馴れきっているのか、そしらぬ顔をしていたが、ほのおはわれわれの野性にも火をつけ、われわれもまた足もとに火をはなった。遼原を焼く火のことばどおり、またたくまに枯れ野をなめつくした火は、やがて斜面のシラカンベ林にうつってきえた。やけあとには、大小無数の旋風がおこって、灰の柱をまきあげる。なかには、百メートルもの高さに灰をまいあがらせた、龍巻きのようにすさまじいのもまじっていた。

野火をうしろに、こんどは右岸をさして、沖積原を左によこぎり、本流に達したところが、ガン河ぞいのいちばん上流の部落シルホーワヤの対岸であった。右岸の山ぎわには、高さ一〇メートルくらいのみごとな段丘がつらなり、本流はそのすそを洗ってながれていた。河はばは、わずか三〇メートルくらいしかなく、減水期のごころでも、かなりふかくて、わたるには板舟をつかわなくてはならぬ。そまつな二そうの板舟で、この大部隊がわたりおえるには、どうせ午後一ぱいはかかるだろうというので、きょうはシルホーワヤどまりときめられた。晝食がおわると、日直は河ごえの監督に、そのほかの隊員は、あるいは採集に、あるいは部落の実態調査や野菜の買いいれに、いそがしく活動をはじめた。

河辺林にわけいってみると、ひとかかえもあるドロやケシヨウヤナギの大木がスクスクとのびていた。こすえ

をあおぐと、眞赤なドロの花穂が、あおぞらに毒々しい。上流からながれてきた種子から芽ばえたのか、カラマツの若木も一本みつかつた。足もとにカサカサとなるイチヤクソウのかわいた葉のなかには、あかいつぼみがつびてきていた。林のはずれの陽だまりには、やわらかい野ネギももえていた。春はもうまぢかにせまっているのだ。しかし、いつのまにかむら雲がとんで、陽がさえぎられると、

魅惑的な早春の散歩気分はどこかへきえて、陰気なつめたい風が外とうのえりを立てさせた。散歩をきりあげて対岸にわたってみると、部落のある段丘の一角には、ガン河の流れをみおろして、テントが立ちならび、ヤナギの枝のアンテナは、はやくも数百キロをへだててモーホをよんでいた。

段丘の高さは、この地点で九メートルに達し、花崗岩・玄武岩・石英粗面岩・玢岩などの、比較的よくそろつた円礫から成っていた。礫層のうえには、四五センチくらい厚さに黒土がのっかっており、その境は明瞭であった。段丘の面はまったく平らで草原におおわれ、やがて右岸の丘へとうつりかわる。この丘の間にくいこんでいる谷の底は、段丘の面と



図 9. シルホーワヤのキャンプ。うつくしく段丘がつらなり、正面とおくに、トゥラ川合流点のキャラバ山がみえる。

自然に連続している。これらの谷は、いまではすっかり涸れてしまっているが、もとそこを流れたであろう水流が、段丘面をまったく開析した痕跡のないのが注意をひいた。それは、谷の形成が段丘の生成に先きだっており、



図 10. シルホーワヤの夕ぐれ。段丘面にそそぐ谷は、平坦面を開析していない。

段丘面のできるまえに、谷の浸蝕がやんだことを、ものがたっているものと思われた。

村人たちも、三々五々あつまってきた、あるいは馬夫たちあいての世間はなしに、あるいはジャガイモや卵の取り引きに余念がなかった。子どもたちは、たのしそりに、テントからテントへとはねまわっていた。われわれともすぐなかよしになった。しかしこの子どもたちは、なんとぼろをきせられているのだろう。綿のはみでた、こじきの着るようなぼろぼろの綿服ばかりなのだ。きうまでみてきた部落では、こんなことはなかった。それは、おそらくこの部落の経済状態を反映しているのであろう。聞けば、この部落は、六年まえに、大興安嶺の東がわ雅魯河ヤルの流域から、村をあげて移住してきたばかりだという。三河でもっともおくまった、春のおとすれのおそいこの土地で、定着へのたたかいはまだはじまったばかりなのである。どの部落にもつきものの満人の雑貨店が、まだこの村には進出していないということは、この部落の成否が、第三者の眼からはまだうたがわれていることを示している。

夕食をすませて、うしろの丘にのぼってみると、中腹にポツリ

とひとつ十字架が立っていた。移住後の最初の死者なのであろう。その十字架がガン河の谷をみおろして立っているのが、わたくしの心をうった。この村の成功をいのる心が、こういう位置に墓地をえらばせたのであろう。われわれは、先をいそぐ旅におわれて、ろくろく三河の生活の実態にふれるひまもなく、とおりすぎてきた。しかし、いよいよ三河を去る日の夜になって、開拓前線としての三河の精神が、われわれにもいくらかは感ぜられてきた。それは、やはりこの十字架のしめすような、開拓者の精神であった。

開拓前線のもつ特有の緊張感、前線をよこぎるたびに、いつも強い魅力でわれわれをひきつける。わたくしは、いまさらのように、もうすこし三河そのものを知りたいという欲望を感じた。しかし、前進したいという欲望は、いっそう強い。フロンティア・スピリットは、自然と人間との直面するところにのみうまれる。われわれもまた、みずから自然のなかにわけいって、開拓者の列にくわりたいのである。われわれの活躍の舞台は、あすからひらける。そこは、自然がいまなお人間を支配している世界である。

ノロとタイメン

あけて一七日の朝、われわれの携帯短波機は、モーホとの交信に成功した。空界の状態は、予期したよりも、ずっと良好であるらしい。いよいよ人里を去る日にとって、なによりも心づよいたよりであった。

オロチョンも活躍する時がきた。銃を肩にしたガイブションや隊長をふくむ一群は、キャラベンに先きだつてシルホーワヤをあとにした。うす霜がとけて、枯れ草はこちよくぬれていた。ふりかえってみると、うつくしくつらな段丘のうえを、えんえんと馬の列がうごいてきた（図版一〇ページ）。この絵のような眺めをふち

どる山々には、いつのまにかシラカンベの林がひろがりはじめていた。北斜面ばかりでなく、東斜面にも西斜面にも、うすく白銀の粉をはきつけたように、林がはいおりてきていた。左手の丘のきれめからのぞいた北方の山の稜線に、ポツポツと黒いものがまじっているのは、カラマツであろう。シラカンベよりややおくれ、カラマツもまた、おなじような順序であらわれてくるのである。この調子では、どうやら案じたほどのことはなく、森林地帯にふみこむことができるらしい。数キロあるうちに、はたして、段丘の斜面に、カラマツの木が一本ポツリと立っていた。

トウラ河の合流点では、丘が河にせまっけていて、ひくい峠を迂回した。峠ののぼりでは、はじめてシラカンベの林をぬけた。銀色の幹は、野火のために、風上のがわが二―三メートルの高さまでまっ黒にこけて、いたいたしい。このへんのシラカンベ林に若木のすくないのは、この野火のせいもあるにちがいない。凍った地面のどけかたがちがうのか、西南にむかった上り斜面のからりとかわいているのにくらべて、東北への下り斜面は、土がじっとりとしめって、車のわだちがくいこんだ。眞南にむいた斜面は、やはり急傾斜がおおくて、まだ一本の木もない。

丘のうえからみおろすと、南には、合流点のひろい沖積原がひらけていた。谷の草原は、ほとんどあますところなく、黒く野火に焼けていた。むきだしになった地面には、氾濫のときに掘りこまれたとおぼしい、浅い水路が、弧をえがいて、いくえにもかさなりあい、ふくざつなようをくりひろげている。さらに、野地坊主にうすまったむかしの河すじ、水をたたえた三日月沼、分流によってすたすたにちぎられた河辺林などがいりまじって、ひろい河谷は迷路さながらであった。この迷路のなかに馬をのりいれて、まちはいなく能率的に道をえらんでゆけるようになるまでには、われわれは、オロチョンや山野そのものから、まだまだおおくのことをまなばね



図 11. ドゥラ川合流点ちかくのガン河の谷。山々にはまだ樹木がすくなく、まったくはだかの谷のなかに、蛇行する流れと河辺林とが、くっきりと帯をえがきだす。

ばならない。

本流からかなりはなれて、右岸の丘陵地帯の行進が半日つづき、ギョードンという支流のほとりに第四夜のキャンプがもうけられた。キャンプ地まちかで、ガイブシヤンは、とうとう一頭のノロをしとめた。ノロのおおきさは、ほぼ中くらいのニッポンジカに匹敵する。一頭分の肉は、二五人の食事をまかなくて、なおじゅうぶんの余裕があった。肉は、くせのない淡白な味だが、まるで脂氣がなくて、たいした味ではない。しいていえば、主食がわりに、いくらでも食べられるところがとりえである。

これにくらべると、河からきた魚のほうは、だんぜん第一級といわねばならぬ。例のグラモースキーは、釣りきちがいとみえて、出貉いらい、しきりと釣り道具をふりまわしていたが——かんがえてみると、ドラガチェンカで人夫をあつめたとき、みじかい竿のさきに擬餌をぶらさげたのももっていたのは、かれであった——きょうもキャン

プにつくとすぐ、本流まで釣りにゆかせてくれと申しでてきた。ノロの肉がにえはじめたころ、馬をとばせてかえってきたのをみると、手に一メートルたらずのやつをぶらさげているではないか。これがタイメンであった。これは和名をアムールイト(図97)といい、興安マグロなどというくだらない日本名まえもあるそうだが、もとのロシア名のほうが、ずっと通りがよい。第一、マグロなどとはとんでもない、これは、れっきとしたマス科の魚なのである。これを釣るには、靴べらそっくりのかたちをした、金属の擬餌をつかう。リールじかけのみじかい竿で、これをシュッと流れのなかに投げ、手もとの車でくるくる糸を巻いていると、引かれた餌が水のなかをひらひらとおよぐ。それを小魚とまちがえてくいついてくるというしかけである。こういう方法で釣れるのは、タイメンが肉食性だからだ。胃ぶくろをあけてみると、二〇センチくらいの小魚が、なかば消化されて二匹もでてきた。その白くしまった肉は、塩焼きによしフライによし、申しぶんない味だった。北満第一といわれているのもっともである。おかげで、グラモースキーは、よほど信用を回復した。

この肉と魚は、番外のごちそうだったのではない。ちゃんとはじめから、隊の食糧の予定のなかにはいつていたのである。われわれの荷物のなかには、主食だけは、ぎりぎり一ぱいの量が用意されていたが、副食のほうは貧弱をきわめていた。乾燥野菜類だけは大量に、あとはわかめ・塩漬いわし・みそ類など、それにわずかのソーセイジ・ジャガイモ・ニンニクくらい、調味料をのぞけば、これが副食の全部だった。びんづめ・かんづめの類は一切もちいなかった。考えてもみたまえ、びんづめやかんづめの何割かをしめる水は、栄養のたしにならず、第一ガラスやブリキはおもいばかりで食えないのだ。乾燥食品におもきをおいたのは、とうぜんのことである。この品目からわかるように、実質的な栄養食品は、事実上すっかり現地食品——狩りと釣りのえものによつていた。もしなにもとれない日があったら、塩いわしをしゃぶっていけばよいのである。われわれは、これを興安

ランチとよんでいた。

これは冒険だろうか。いや、探検は冒険ではない。冒険であってはならない。われわれには自信があった。北國は動物の國である。野生動物の王國ウスリーほどではなくとも、河にはマスやカモが群れ、森にはシカやクマやライチョウがひそんでいるだろう。そうでなくては、狩獵民族オロチョンのすめるはずはない。オロチョンの生活技術に信頼し、オロチョンをつれてあるくことによって、おもしろい食糧はこびの勞ははぶかれるであろう。このみとおしにもとづいた計画は、冒険どころか、むしろ探検の正統的な傳統にしたがったものといわねばならない。いったい、これまでの日本の大興安嶺調査隊は、あまりにもその技術が軍隊的でありすぎた。軍隊ならば、行軍中の全物資を兵站線にたよるのが原則であろう。しかし、探検は探検であって、軍事行動ではない。ちがった目的のためには、ちがった技術があるのである。くりかえされた失敗の原因は、おそらく、未開地の探検についての傳統が、日本にはまるで欠けていたという点にあったのであろう。

それはさておき、行進四日めに、予想は実現した。夕食の膳には、ノロがありタイムンがあり、剝製ののこりのカモの肉があった。河べりには、やわらかい、ほそいエゾネギの若葉がもえはじめていた。エゾネギは、國によつては、野菜として栽培されている種類ではないか。これだけはせいたくに用意しておいた油の役にたつときがきた。前途のうれいは、ひとつのぞかれたのであった。

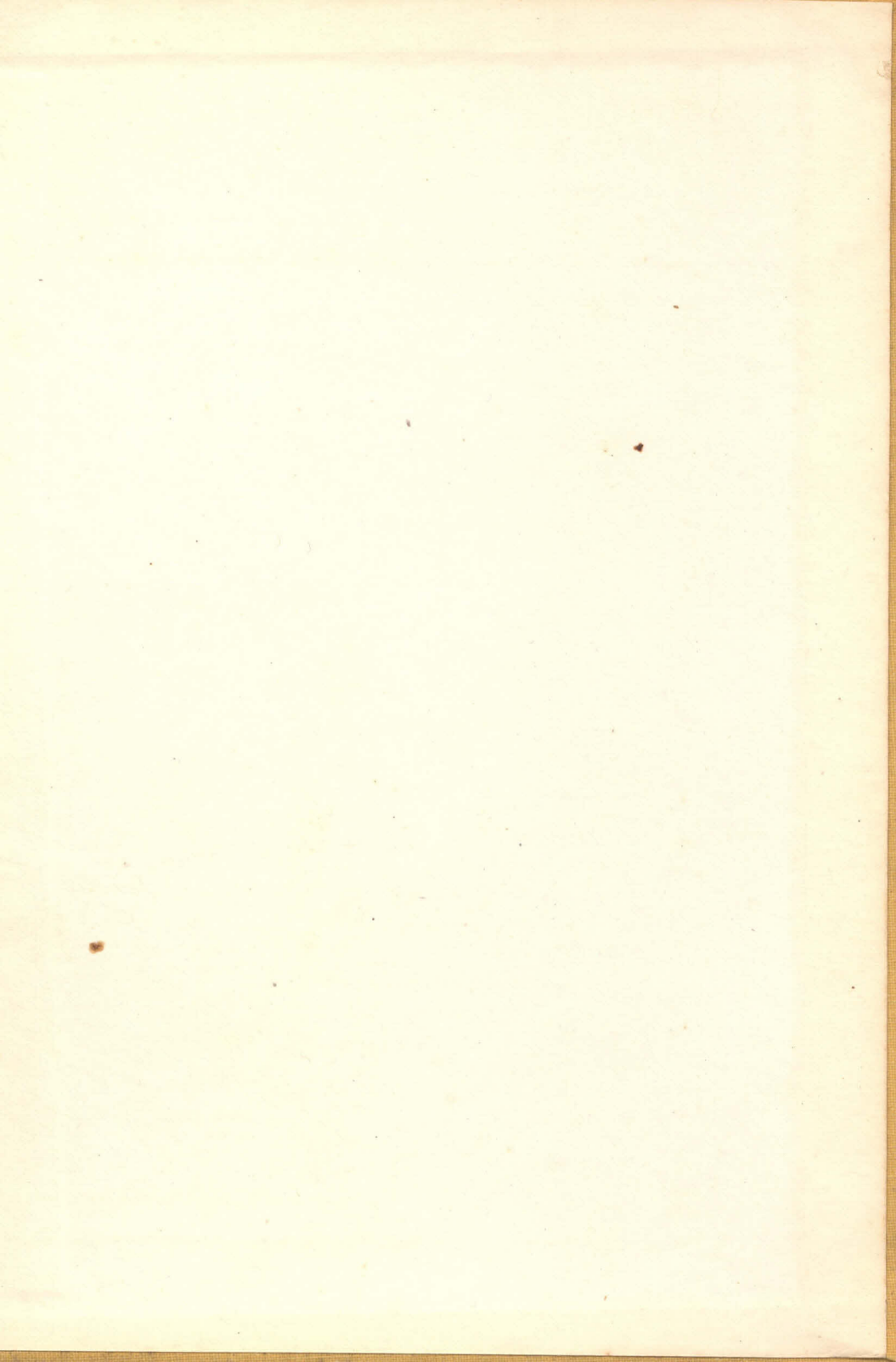
紫 陽 道 人

紫 陽 道 人

あけがたのきびしい冷えは、毛皮の寝袋のえりもとにしみこみ、テントを出れば、あいかわらず一めんの霜で

大興安嶺探檢

每日新聞社刊



大興安嶺探檢

1942年探檢隊報告

EXPLORATIONS IN
THE GREAT KHINGAN
MOUNTAINS

The Japanese Great Khingan
Expedition 1942

Edited by
KINJI IMANISHI

今西錦司編・毎日新聞社刊

COPYRIGHT, 1952, BY THE MAINICHI PRESS.

EXPLANATIONS TO THE MAP

The drainage map of the Northern Great Khingan (1:1,000,000) attached to the present volume was prepared by the expedition. It is based on the vertical aerial photographs taken by the Manchurian Air Line Company just before the expedition. The result of the aerial survey did not appear by the end of World War II, and are unavailable. The skewness caused by photography has been adjusted as far as possible with the result of the astronomical observations made during the present expedition, which are tabulated on the map. The map of Manchuria published in 1939 by the Japanese Land Survey (1:1,000,000) was consulted as to the courses of the Amur and the Argun. Mr. Sansei Ono was in charge of drawing the map.

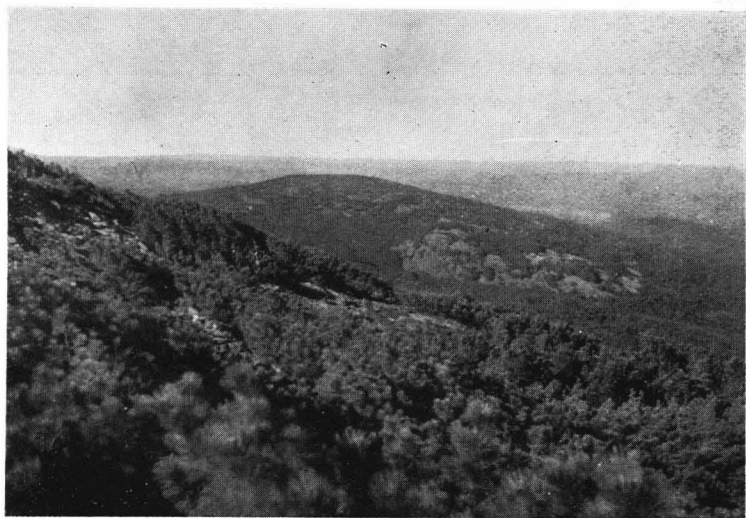


ガン河最上流のキャンプ。

この探検は、1942年の5月から7月まで、大興安嶺北部の密林地帯にむかっておこなわれた。



晩壯年期の波状山地は、森林におおわれて、えんえんとつらなり、北海道全島をのみこむ廣さの大高原となっている。森林限界をぬいた高峯はまれであるが、そこには、ハイマツと岩屑とにおおわれた、荒涼とした風景がくりひろげられる。



北部大興安嶺の最高峯オーコリドイ(1530m)のハイマツ帯。

ピストラヤ河源流の山々.



マンクイ川の上流.





代表的なカラマツ林のながめ、地上にコケモモをしきつめている。

河谷の草原にまじったカラマツ大木の疎林、





山火事あとに株立ちとなったシラカンバ林。イソツツツの下生え。

森林は、圧倒的にダフリアカラマツによって優占される。コウアン



シラカンバもこれに次いでおおく、とくに山火事あとを特徴づける。地形的に乾燥した場所には、シベリアアカマツが小面積の純林をつくるのがみられる。



ガン河源流の大興安嶺主稜上のシラカンバ林。

森林限界の風景。ハイマツ、地衣におおわれた礫原、まばらに生えたカラマツ。





大形の礫からなる平地の礫原。アルパツハ河上流。

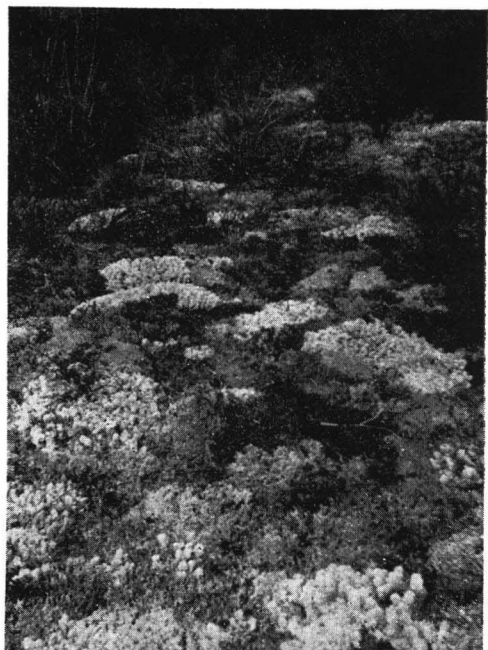
中央部の山地は、いたるところに露出した角礫の堆積と、そのうえをおおうハナゴケ類の地衣とによって特徴づけられる。この礫原は、過去の地質時代にこの地方を支配した、

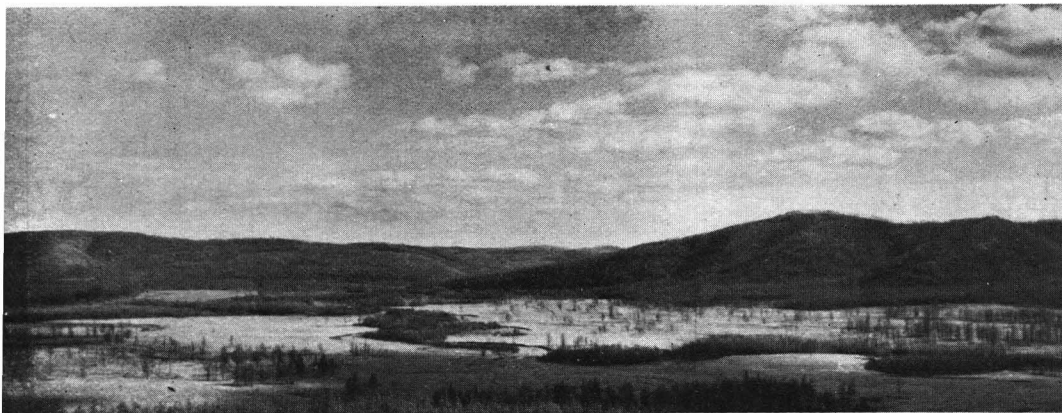
酷烈な氣候の産物と考えられ、また現在の氣候のなおきびしいことをものがたる。

ハナゴケにうずめられた斜面の礫原。



ハナゴケ類の群落。





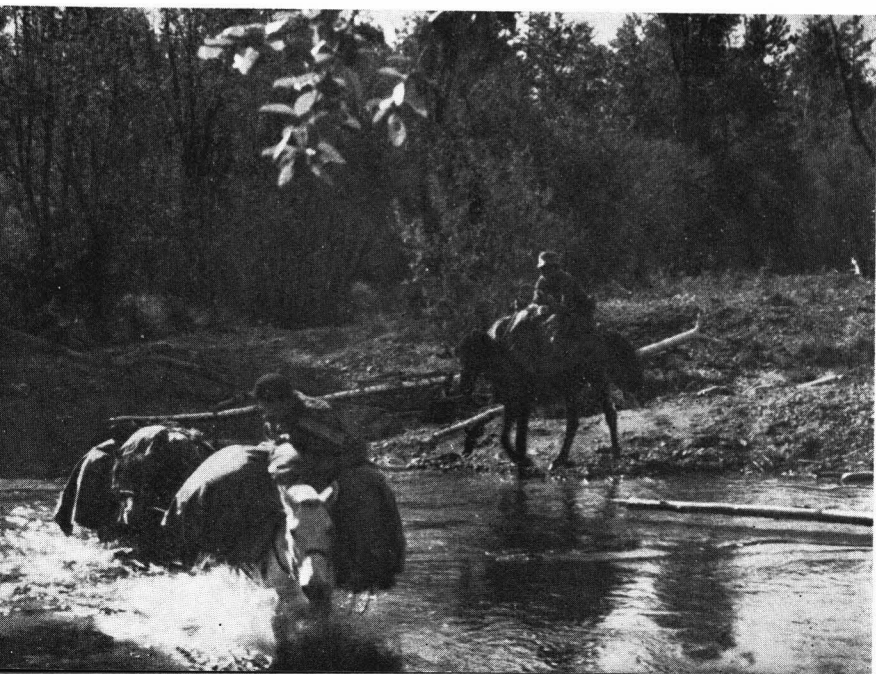
ヤンギール川合流点附近のガン河の谷のパノラマ。右手の前方からヤンギールがそそぎ、本流は峡谷をなして、左端の山の向うへと流れでる。

夏のターリンホの流れ。





ガン、ビストラヤ、アルバジハなどの大河は、いずれも幅ひろい谷をもち、そのなかを不規則に蛇行している。谷は、まわりの山地と対照的に、森林にとぼしく、廣大な濕地や草原によって占められ、流れに沿うて、ドロ・ヤナギの類の河辺林がよく発達している。



夏の支流は茶褐色ににごり、馬をのりいれるに不気味であった。



ガン河の下流，シルホーワヤのみごとな段丘。

花をつけた早春の野地坊主。

マメカンバの灌木ツンドラ，アルバジハ河上流。



谷をうずめた湿地は、探検隊の行動をさまたげる最大の障害であった。隆起したスゲ類の株の間に水をたたえた野地（ヤチ）坊主濕原はもっとも多く、また中央部の高地には、灌木性のカンバ類を密生した灌木濕原が、大面積をしめる。



水をたたえた野地坊主濕原。



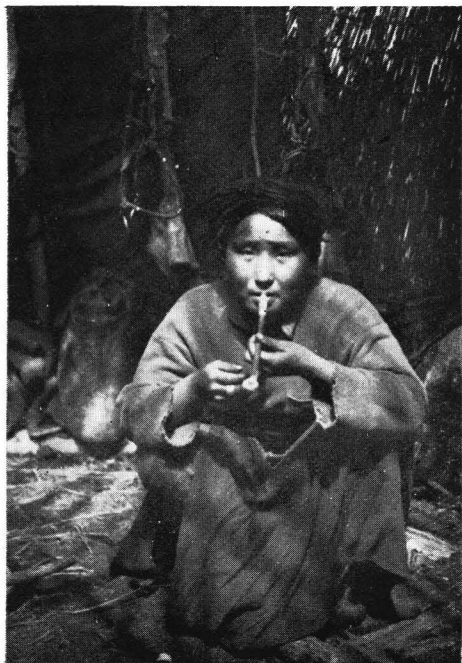


馬オロチョンのすまい。ガン河中流にて。

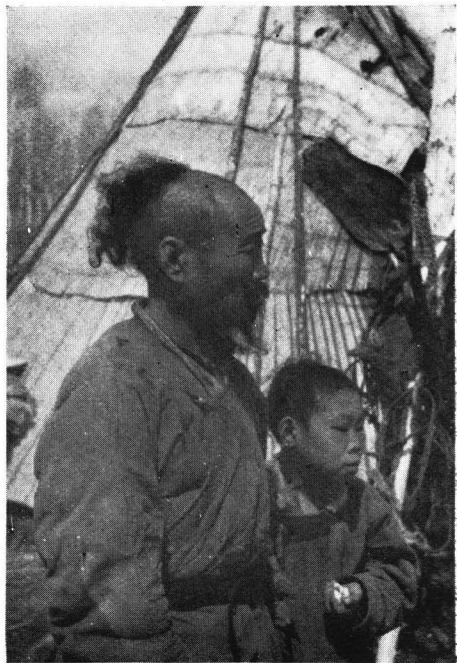
北部大興安嶺の住民は、ツングース系の狩猟民族オロチョンである。ガン河中流にすむものは、家畜として馬を飼っている馬オロチョンで、円錐形に木を組みあわせたすまい（ユルタ）にすみ、なめし皮の服を着、屍体を風葬する。



移動のあとに残されたユルタの骨組み。



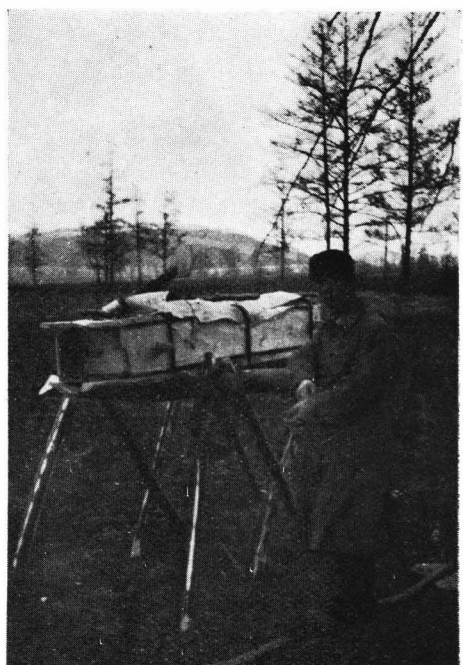
馬オロチョンの女.



馬オロチョンの男と男兒.

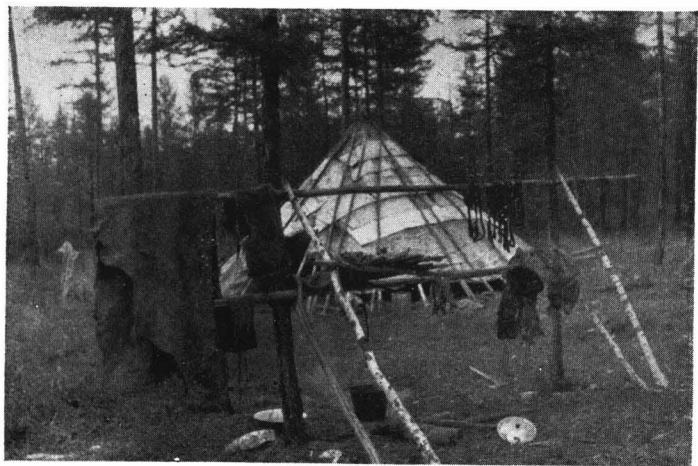


馬オロチョンの倉庫.



馬オロチョンの風葬屍体.

ガン河上流以北の密林地帯には、トナカイを家畜とするトナカイ・オロチョンがすむ。やはりおなじようなユルタ(右上)にすみ、移動生活をおくるが、いちじるしくロシア化しており、洋服を着、(右中)ギリシヤ正教を信じて屍体を埋葬する(右下)。一般に物質生活はゆたかたで、シナ化した馬オロチョンのまぜしさとよい対照をなしている。

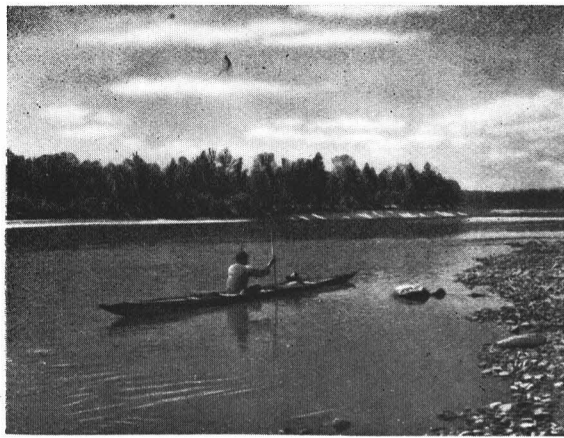




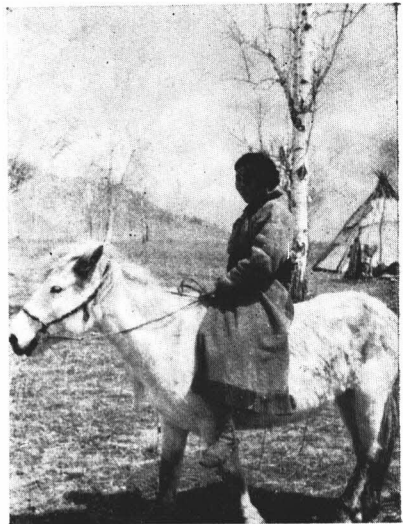
トナカイにのってゆく老婆.

荷をつんで河をわたるトナカイの列.





シラカンバの皮でつくった舟。トナカイ・オロチョン。



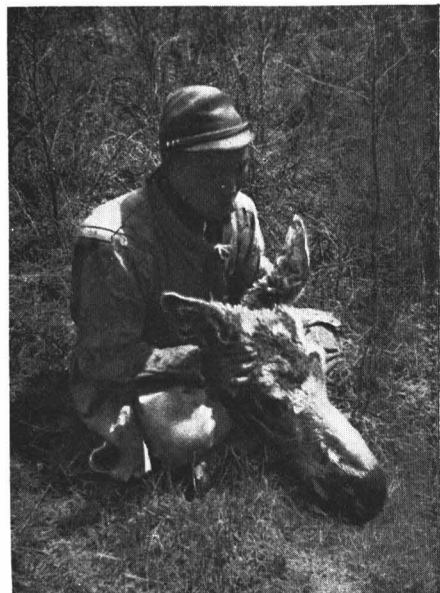
馬にまたがった馬オロチョンの婦人。



トナカイの乳しぼり。



荷物をつけたトナカイ。



ハンダハン（シベリアエルクシカ）
の首をもつ馬オロチョン。

序

探検というものは、そのスタートにおいて、すぐれた発案者と、この案に共鳴して、これを推進してゆく何人かの熱心な同志と、そして背後から、この案が軌道にのるところまで、これを経済的に援助してくれるよき理解者と、すくなくともこの三つが揃わなければ、成立しない。

わたくしはその頃、ヒマラヤと大興安嶺とを考えていた。ヒマラヤの夢が破れたのちは、大興安嶺が氣にかかって仕方がない。もちろん大興安嶺なら、どこでもよいというのではない。はじめからその縦断を考えていたのである。

大興安嶺の同志のほとんどが、当時学生であったということ、異常な現象として、探検史上に特筆されねばならないであろう。戦争はたけなわであった。えらい学者たちが、われもわれもと軍に便乗して、右往左往している。それを嘲るかのごとく、大興安嶺の学生は、軍を乗りこえ、軍のまもりの外に、自由の天地を求めていった。

だからこの書は、一つの精神の記録である。

当時の学生の何人かは、いまではもうひとかどの学者になっているから、各自が探検の資料を整理分担して、論文集をつくることも、望ましいのであるけれども、われわれとしてはそれとは別に、やはり記録としての生まなましさを、残しておきたいという願望やみがかたいものがあつたので、最初は学術論文として独立さすつもりであつたものも、ばらせるかぎりばらして、紀行の中に織りこむことにした。つまり、精神の記録であるとともに、また科学的記録としても、けつして水準をおとさないような、すこし口はばたいたいい方をすれば、われわれでなければできないような探検報告を、ねらつたのである。

われわれより後に行われた、元満洲國林野局の大興安嶺調査隊は、一そう大きな收穫をもたつたことであつたろう。しかし残念ながら、その調査資料は全部、終戦とともに行方不明になつたというから、この書は、戦時中に行われた日本人の仕事の中で、さいわいに生きのこつた数少ないものの一つとして、大興安嶺に関するかぎり、今後のお役に立つであらうことを信ずる。

いん滅をまぬがれたとはいふものの、もし文部省の学術成果刊行助成金が、本書に対して與えられなかつたならば、われわれの大興安嶺は、いつ日のめをみるか、わからないところであつた。当事者に対して、厚く御禮申しあげる次第である。

出版のことを氣にやみながら、あれからはや十年過ぎた。しかし、この十年を待たつたお蔭で、思わぬよいこともあつた。探検隊は、じつに大勢の方々の支持をうけたのであるが、いまや晴れ

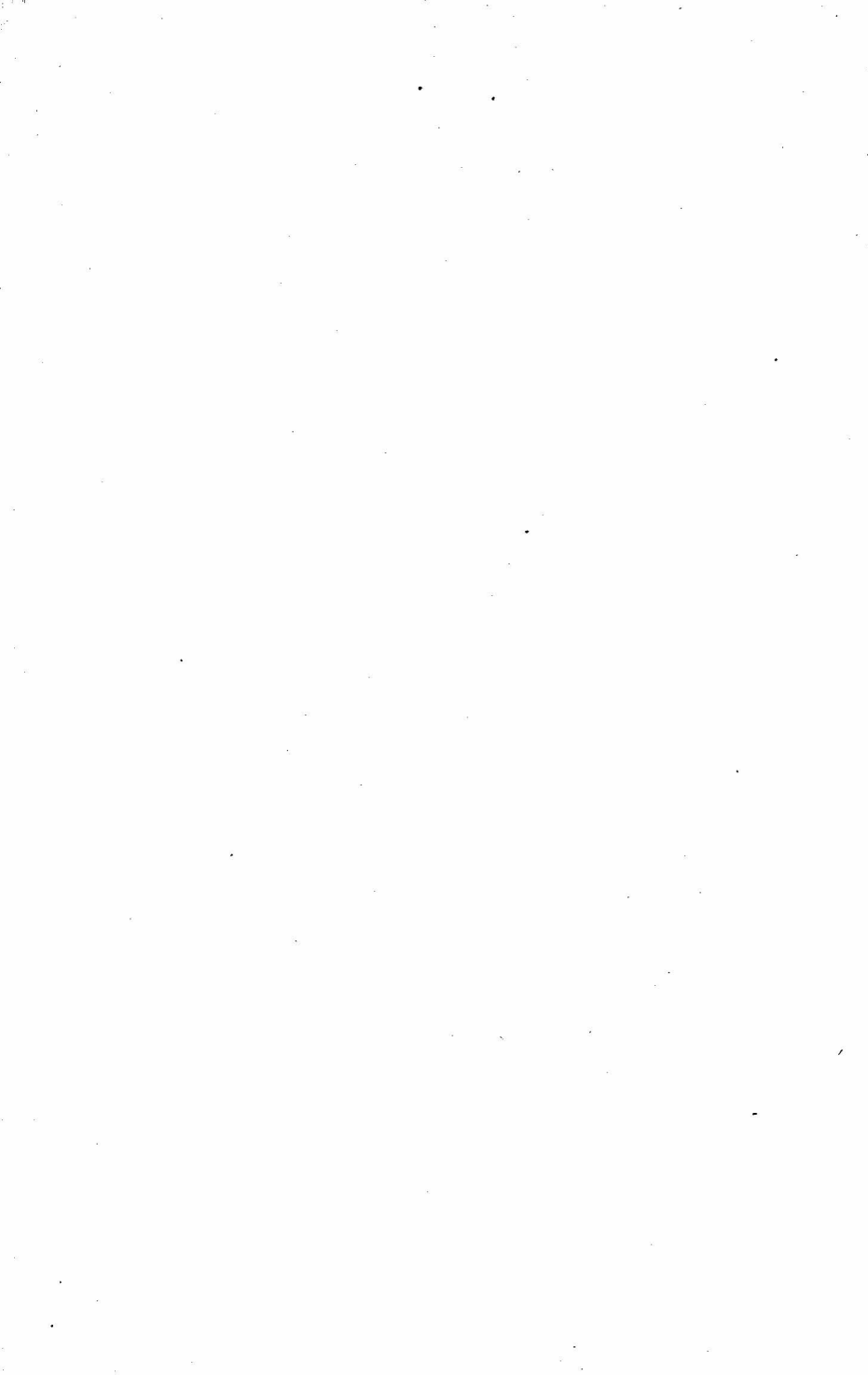
て、その方々に謝辞をのべることが、できるときとなつたからである。本文には、これらの方々のお名前をあげて、その御厚意を記念し、われわれの微意をあらわしておいたので、ここにはとくに、この探検の育ての親ともいふべき、藤村謙氏のお名前をしるすにとどめることを、お許し
いただきたい。

最後に、この探検隊の隊長であつた関係上、わたくしが本書の編集者になつてゐるけれども、編集事務はそのほとんどすべてを、当時の隊員、吉良龍夫・川喜田二郎の二君に負つた。とくに吉良君には、原稿の大半を執筆してもらつてゐる。同君の労を厚く謝したのである。また本書の出版を心よく引受けてくださった、毎日新聞社に敬意を表しておきたい。

一九五二年二月

新らしい探検の構想を練りつつ

今 西 錦 司



編者のまえがき

一、この本は、一九四二年五月七月、今西錦司を隊長としておこなわれた、北部大興安嶺探検隊の公式報告書である。

一、隊員および編成は、つぎのとおりであった。() 内は、当時の所属をしめす。

隊長 今西錦司(京都大学理学部動物学教室)

副隊長・漠河隊長 森下正明(京都大学農学部昆虫学教室)

本隊員 吉良龍夫(京都大学農学部学生) 伴 豊(京都大学文学部学生)

小川 武(大阪商科大学学生) 折口勝夫(医師)

佐藤信男(測量隊) 山本幸雄(滿洲航空会社)

大塚 弘(無電技士) 郭 景章(無電助手)

支隊長 川喜田二郎(京都大学文学部学生) 藤田和夫(京都大学理学部学生)

支隊員 梅棹忠夫(京都大学理学部学生) 加藤醇三(京都高等蚕糸学校生徒)

支隊員 土倉九三(京都高等蚕糸学校生徒) 加藤醇三(京都高等蚕糸学校生徒)

漠河隊員 江原真之(京都高等蚕糸学校生徒) 松本明保(測量隊)

川添宣行(立命館大学学生) 張 貴堂(漠河警察隊)

本郷興作(無電技士)

関 警士(漠河警察隊)

一、この本の執筆分担は、つぎのとおりである。紀行の部は、一・探検の前夜、二・ガン河および五・ピスト

ラヤ河の三章を吉良龍夫が、三・白色地帯を川喜田二郎が、四・漠河隊を森下正明が、それぞれうけもった。ただし、専門的内容をふくむ部分は、隊員七名が筆をとったものを、各章の担当者が、てきとうな場所に挿入した。内容に関する責任をあきらかにするため、各節のおわりに、執筆者の名を註記しておいた。専門別筆者は、植物(吉良・川喜田)、動物(梅棹)、地形地質(藤田・川喜田)、民族(今西・森下・伴)である。用語および文章の統一には、吉良があたった。

一、地名は、不統一な日本名およびシナ名をさけ、なるべく國際的な慣用名にしたがった。原綴りおよび各國名の対照は、巻末の地名索引によられたい。

一、動植物名は、それぞれ専門学者の同定をわすらわした。同定の労をとられた、北川政夫、佐藤正己、堀川芳雄、徳田御稔、清棲幸保、杉谷岩彦、奥村定一、その他の諸氏に、ふかく感謝する。なお、採集動植物目録にふくまれている生物については、原則として本文中にはラテン名をあげなかった。

一、引用文献は、一節ごとにまとめて、節のおわりに註記した。

一、折りこみ地図は、満洲航空会社により撮影された垂直航空写真をトレースしてえられた水系図を原図とした。ただし、この原図には、三角測量による修正がほどこされていないので、アムール河およびアルガン河の流路については在來の地図を参照し、中央部については、われわれによる天測結果をもちいて、ある程度の修正をくわえた。製図は、小野三正氏をわすらわした。

一、挿入した写真は、森下正明・藤田和夫・小川武の撮影により、凸版挿絵は、牧野四子吉・高柳重雄両氏の手になるものである。

目次

序

編者のまえがき

一、探検の前夜

南から北へ(三) 傳統(九) 大興安嶺の密林地帯(二六) 探検の歴史(1)(二三) 探検の歴史

(2)(三〇) 出発の前夜(三三)

二、ガン河

三河(三三) 出発(三五) 最初のキャンプ(六六) 森林ステップの自然誌(五五) さいごの部落

(七一) ノロとタイメン(七七) 紫陽道人(八一) 馬オロチョン訪問(八六) 馬オロチョンの生

活(五二) 樹海に入る(一〇三) 雪の峡谷(一〇八) 湿地と永久凍土(一二三) 森林の構造(1)(三三)

ナプタルダイ(一二八) ハンダハンとノロ(一三五) 冬を追うて(一四四) 英吉里山(一五二) 主稜ごえ

(一五七)

三、白色地帯

春峠・花峠 (二六七) 春は山の上から (二七四) 消えうせた分水嶺 (二七五) ビストラヤの源流へ (二七六)
望み山 (二八〇) 湿地の様相 (二八〇) 水源から水源へ (二九〇) 荒涼たる世界 (二九二) 礫原と岩屑被
覆 (二九七) 永久凍土のいぶき (二九五) 白色地帯 (三〇〇) ニジネ・ウルギーチ (三〇三)

四、漠河隊

アムールの船旅 (1) (二三五) アムールの船旅 (2) (二四一) ジェルトウガ共和国 (二四六) モーホでの準備 (二五二) 第一歩 (二五七) 最初のトナカイ・オロチョン (二六二) 難行 (二六九) チャン・クエ
イ・タン (二七四) チーリンジへ (二七九) トナカイ・オロチョンの墓 (二八三) チーリンジの生態 (二八六)
うたがわれた日本人 (二九六) トナカイとともに (三〇〇) 待ちぼうけ (三〇七) 基地―支隊きたる
(三二二) トナカイについて (三二六) トナカイ・オロチョンの経済生活 (三三四) クマラ河水源の偵察 (三三三)
五、ビストラヤ本流からアムールへ

赤ひげの猟師 (三三九) ナキウサギそのほか (三四六) 森林の構造 (2) (三四九) 急行軍 (三五〇) 空からの訪問 (三五六) 本流の渡河 (三七〇) 河辺林の構造 (三七五) からまわり (三八二) オーコリドイ (三八五) オートコリドイの自然誌 (三九六) アカシカ・クマ・オオカミ (四〇四) 魚の世界 (四〇六) わ
かれ (四二七) 花の海 (四三三) 旅のおわり (四三七)

六、学術報告

地形と地質 (藤田和夫)

北部大興安嶺 (四九) 水系と山系 (四〇) 岩石の分布 (四二) 地形発達史 (四六) 特殊な地形

(四九)

過去の氣候 (藤田和夫・川喜田二郎・吉良龍夫)

礫原と岩屑被覆 (四五) 永久凍土層 (四六) 氷河遺跡 (四六) 東シベリアの寒冷期の状態を説明す

る一仮説 (四七) 他地方との対比 (四七) むすび (四七)

落葉針葉樹林の生態学的位置づけ (吉良龍夫)

東シベリアの落葉針葉樹林 (四七) 落葉針葉樹林の領域 (四七) 氣候帶上における位置づけ (四八)

再検討 (四九) 東北アジアの氣候区分と生態系区分 (四九)

採集植物目録 (吉良龍夫) (四九)

採集動物目録 (梅棹忠夫) (五〇)

農業北限線の問題 (川喜田二郎)

まえがき (五四) 温度指數三五度線と農業可能限界線 (五五) 北部大興安嶺の周辺 (五五) 日本列

島の場合 (五六) ソ連領シベリアの場合 (五七) その他の地域 (五三) 農業北進をはばむ要因 (五六)

索引

附表目次

- 表1 馬オロチョンの狩猟表 (六六)
- 表2 馬オロチョンの交易山貨表 (九六)
- 表3 斜面の向きによる森林構造のちがい (一三三)
- 表4 斜面の向きによる土壌断面のちがい (一三四)
- 表5 灌木性カンパ類二種の比較 (一八九)
- 表6 降雨と凍土の融解との関係 (二二九)
- 表7 トナカイ・オロチョンの移動路 (三〇三)
- 表8 モーホ・オロチョンのトナカイ所有数 (三一九)
- 表9 モーホ・オロチョンの支出表 (三二七)
- 表10 モーホ・オロチョンの狩猟表 (三三六)
- 表11 モーホ・オロチョンの収入表 (三三〇)
- 表12 各水系における魚の分布 (四二二)
- 表13 タイメンとシユーカーの胃の内容 (四二三)
- 表14 六種の魚のあいだの食物連鎖関係の模式 (四二三)
- 表15 レノックとハイルスとの食物の比較 (四二四)
- 表16 魚の体重階級 (四二五)
- 表17 北部大興安嶺の河川における魚類社会の構造 (四二六)
- 表18 おもな岩石標本の検鏡結果 (四二五)
- 表19 ユーラシアの亞寒帯針葉樹林帯のおもな樹種のすみわけ関係 (四六二)
- 表20 ユーラシア亞寒帯各地の乾湿度表 (四六八)
- 表21 東北アジアの氣候区分表 (四九三)
- 表22 オビ北地の播種面積 (五〇四)

挿図目次

- 図1 北部大興安嶺のおもな水系 (三二五)
- 図2 最近のおもな探検隊のルート (四〇〇)
- 図3 ヨーロッパとアジアをつなぐ黒土の帯 (四五)
- 図4 ドラガチェンカ出発 (五八)
- 図5 泉のほとりの雪田 (五九)
- 図6 ウスト・クリーからステップのなかをボクロフカへ (六二)
- 図7 オオノロ (六九)
- 図8 ガン河の左岸にみられた玄武岩の露頭 (七〇)
- 図9 シルホーワヤのキャンプ (七五)
- 図10 シルホーワヤの夕ぐれ (七六)

- 図11 トウラ川合流点ちかくのガン河の谷 (二七九)
 図12 野地坊主との最初のたたかい (二八四)
 図13 馬オロチョンのボルカン (その1) (二八八)
 図14 ボルカン (その2) (二八九)
 図15 馬オロチョンの家族あたり馬所有数 (二九三)
 図16 オロチョンの分布図 (二九四)
 図17 イワノガリヤスの枯れ野 (二九五)
 図18 馬オロチョンのものおきからでてきた器具類 (二九六)
 図19 峡谷部の雪 (二九七)
 図20 流れのあとの凹地をうずめた野地坊主 (二九八)
 図21 流れのふちの野地坊主 (二九九)
 図22 斜面の向きによる森林の構造のちがい (三〇〇)
 図23 ガイブシャン (三〇一)
 図24 ナプタルダイの遠望 (三〇二)
 図25 ハンダハンの糞 (三〇三)
 図26 シベリアエルクシカ (ハンダハン) (三〇七)
 図27 ノロとハンダハンの糞の分布 (三〇八)
 図28 ガン河の最源流 (三一五)
 図29 英吉里山の頂上 (三一五)
 図30 せんたくと着換えをすませて (三一六)
- 図31 支 隊 (二六六)
 図32 ユルタ・テント (二七三)
 図33 ビストラヤ本流とナラチの合流点 (二七九)
 図34 マメカンバとコウアンヒメオノオレの葉の比較 (二八九)
 図35 ビストラヤ上流の谷における湿地の分布 (二九三)
 図36 サカイツツジの花 (二九三)
 図37 ビストラヤ最源流の谷 (二九七)
 図38 中央部山地の貧弱なカラマツ林 (三〇〇)
 図39 山火事のあとにできたマメカンバの乾性イエルニ
 タ (三〇四)
 図40 礫原の諸相 (三〇六)
 図41 基地における礫原の断面 (三〇七)
 図42 ジャーリンドのハイサーグラフ (三〇七)
 図43 かたむいて立つカラマツ (三〇七)
 図44 モンドリの谷のナレヂ (三〇八)
 図45 ニジネ・ウルギーチの中流にて (三〇九)
 図46 アムール河 (三三三)
 図47 アムール峡谷のソ連がわの岸にみられるシベリア
 アカマツの林 (三四五)

- ㊦48 峠のほこら (二六〇)
 ㊦49 トナカイのくびかざり (二六三)
 ㊦50 トナカイ (二六三)
 ㊦51 トナカイ・オロチョンのかりのユルタの内部 (二六五)
 ㊦52 ユルタの構造の複雑化の系列 (二六五)
 ㊦53 北方アジアの移動民族の住居形態分布図 (二六六)
 ㊦54 ラオコウの部落 (二六六)
 ㊦55 トナカイの鈴 (二七〇)
 ㊦56 漠河隊のはじめてのキャンプ (二七一)
 ㊦57 焚き火とチャン・クエイ・タン (二七五)
 ㊦58 リスとりのわな (二七六)
 ㊦59 モンドリの流れをわたる (二八〇)
 ㊦60 チーリングジ盆地 (二八二)
 ㊦61 トナカイ・オロチョンの動態図 (二八四)
 ㊦62 チーリングジの耕作 (二九三)
 ㊦63 トナカイの背につむ容器 (三〇〇)
 ㊦64 大興安嶺の丸太小屋 (三〇二)
 ㊦65 モーホ・オロチョンの移動路の数例 (三〇四)
 ㊦66 トナカイ・オロチョンのパン焼き (三〇四)
 ㊦67 ホクマンリス (三二二)
- ㊦68 基地の小屋 (三二六)
 ㊦69 イェルニクに放されたトナカイ (三二八)
 ㊦70 トナカイ・オロチョンの倉庫 (三三三)
 ㊦71 トナカイ・オロチョンのハンド・バッグ (三三六)
 ㊦72 クマラ河水源への峠 (三四四)
 ㊦73 赤ひげの獵師 (三四四)
 ㊦74 コンホ (三四三)
 ㊦75 アムールナキウサギ (三四六)
 ㊦76 チョウセンシマリス (三四八)
 ㊦77 礫性の土地にそだつチョウセンヤマナラシ (三五〇)
 ㊦78 エゾノムラサキツツジの密生 (三五二)
 ㊦79 カラマツ林におよぼす山火事の影響 (三五四)
 ㊦80 シラカンバ若木の密生 (三五五)
 ㊦81 トナカイ・オロチョンのつくった魚どめのせき (三五〇)
 ㊦82 トナカイ・オロチョン冬營地の見取り図 (三六二)
 ㊦83 トナカイ・オロチョン冬營地の構造物 (三六三)
 ㊦84 トナカイ・オロチョンのスキー (三六四)
 ㊦85 ビストラヤの渡河点にて (三七三)
 ㊦86 早春の河辺林 (三七六)

- 図 87 夏の河辺林 (三七七)
- 図 88 蛇行と河辺林の新成 (三七七)
- 図 89 トナカイ・オロチョンの鹿笛 (三八三)
- 図 90 午後一〇時のオーコリドイ (三八七)
- 図 91 森林限界附近から西にむかつての展望 (三九〇—三九二)
- 図 92 オーコリドイ山頂 (三九三)
- 図 93 ハイマツの分布 (四〇〇)
- 図 94 森林限界附近の地衣原 (四〇二)
- 図 95 マンシュウアカシカ (四〇五)
- 図 96 オオカミの分布 (四〇八)
- 図 97 北部大興安嶺の魚類 (四二二)
- 図 98 ソルノピョーク斜面にできた草原 (四二〇)
- 図 99 夏の野地坊主湿地 (四三三)
- 図 100 チーリング盆地の花の海 (四三五)
- 図 101 トナカイ・オロチョンのしよいこ (四三八)
- 図 102 チーリング附近のアルバジハ本流 (四三〇)
- 図 103 トナカイ・オロチョン訪問のスナップ (四三二)
- 図 104 モーホの船着き場 (四三五)
- 図 105 北部大興安嶺岩石分布図 (四三三)
- 図 106 北部大興安嶺中央部の東西模式断面図 (四三七)

- 図 107 シベリアにおける永久凍土層の分布図 (四三七)
- 図 108 階段状地形の形成の過程をしめす模式図 (四三〇)
- 図 109 シベリアにおける年平均気温等温線および冬季の積雪量の分布 (四三二)
- 図 110 気候変化にもなり永久凍土層の変化 (四三三)
- 図 111 シベリアにおける洪積世氷河分布 (四三六)
- 図 112 東シベリア南部の植物社会分布図 (四三九)
- 図 113 温度指数の等値分布 (四四四)
- 図 114 乾燥指数の等値分布 (四四六)
- 図 115 ポクロフカの土壤水分平衡図 (四九〇)
- 図 116 東北アジアの気候区分図 (四九四)
- 図 117 スカンジナヴィアの農業北限地帯 (五二五)
- 図 118 シベリアの農業北限線 (五三七)

一、探檢の前夜

一九四一年の九月ははじめのある日、この大興安嶺探検隊のメンバーのうち、今西・森下・梅棹・川喜田・吉良の五人は、つれだって、ヤシの木かけ道をおもっていた。赤道にほど近い太平洋のまんなかのはなれ島——ミクロネシアのポナベ島——の、それも遠洋航路の港から正反対のがわにある、オネというしずかな村だった。濃いみどりのココヤシの葉をおしてやわらいだ熱帯の日ざしが、あずき色の土に、五つの影ぼろしをおとしていた。ときおりヤシの林のおくに、島民のニッパ・ハウスがちらりとのおいたが、ひるさがりの道には、ほかに人通りもなかった。その日からはじまる島民生活の調査の対象となるはずのこの村に、われわれは前夜についたばかりだったが、この島にきて一と月以上たいたいまでは、ヤシの木かけ道は、まるで長年あるきなれた道のように、氣やすかった。

四〇歳に手のとどころとする、学者としても探検家としても油ののりきった今西さんや、三〇歳まえの青年昆虫学者であった森下さんが、どんな氣もちでこの道をおもっていたかは知らない。しかし、まだ大学生になったばかりのあとの三人は、どうやら、はるばると来たものよ、という思いを、かみしめているらしかった。だれかともなく、三人の話題は、京都でわかれてきた、ふたりの仲間のうえにおちていった。

「藤田は漢河^{カキカ}まで行けたかな？」

「かれに先きをこされるのは、残念しごくだな！」

「それよりは伴さ。うまくもぐりこめたかなあ。あいつのことだから、押しの手でやってるだろうけど……」

……。」

藤田は、京都大学の重力測定班にくわわって、満洲にわたっていた。松花江ソウカキョウを船でくだって黒龍江アムルに出、うま
くゆけば、満洲の北のはしにあるモーホの町までさかのぼっているはずだった。伴は、学生の海外旅行のむずか
しいなかを、なんとかして内モンゴリアにもぐりこもうとしていたのである。

そうだ。われわれも、ほんとうは北へゆきたかったのだ。北方の大陸へゆきたかったのだ。南のはての小島に
立ってみて、われわれの望みは、いっそうはっきりしたかたちをとっていた。南の島の生活は、それはそれでけ
っこうたのしく、また充実していた。けれども、せめてここが、ニューギニアかボルネオくらいの本格的な原始
林の大島だったら……。ポナベ島は、淡路島の半分あまりの面積しかなくて、島の中央にある最高峯のうえに
立つと、かなしいことに、どちらをむいても、珊瑚礁にくだける太平洋の波が、かすかに白い線となってみえる
のであった。けれども、ながいあいだ楽しみにしていた、大リーダー今西さんにしたがっての最初の遠征のよろ
こびと、この夏にうけた本格的な探検家としての訓練が生かされてゆくであろう來年への期待とで、わたくした
ちの心はふくれあがっていた。

「來年の今ごろは、どこにいらことだろうな。北かな。南かな？」

学生のもっている力が、貴重な人的資源として、ようやく軍の注目をひきはじめた時代だった。われわれが横
浜を出帆して数日後に、学生の海外旅行禁止令がでていた。オネをひきあげて港のあるコロニアの町にかえって
みると、内地の放送は、最初の大学生の卒業期三ヵ月くりあげをつたえた。しかし、こういう時代にも、とほう
もないことを考える連中というものはあるものらしい。わたくしたちが、それだった。わたくしたちは、探検家
になろうと考えていたのである。これは、奇妙なグループであった。

わたくしたちは、もう、ひとかどの探検家を氣どっていた。もっとも、文献による研究ばかりおおくて、探検の実践的活動の経験をもつ人のほとんどいないこの國では、わたくしたちは、たしかに第一線であったかもしれない。われわれは、すでに、アルピニストとしての訓練を、そうとう積んでいた。高等学校時代から、一年に一〇〇日は山にのぼっていたという連中だった。三高の図書館には、ジオグラフィカル・ジャーナルが、全巻そろっていた。こんなものを借りだすのは、わたくしたちだけだった。ひまさえあれば、たぶん時には講義のほうを失礼してつくったひまに、あの特徴のある青い表紙を一冊々々くってみたものだった。われわれは、いきなり正統的な國際探検界の傳統を吸収しようとしていたのだ。それは、となりに京都大学をひかえて、アカデミックなふんいきにつつまれた、めぐまれた環境のせいでもあった。

われわれは、また、いずれおとらぬナチュラリストでもあった。アルピニストとしての訓練をうけながらも、それぞれに、野外の自然科学者としての素養を、すこしずつ積んでいた。大学にはいるときも、それぞれの傾向にしたがって、探検家になるのにもっともつごうのよさそうな学科をえらんだ。吉良は、農学部にはいつて、植物生態学に興味をもちはじめていた。梅棹は、理学部の動物学科にはいつた。藤田は、やはり理学部で、地質学科をえらんだ。川喜田と伴とは、そろって文学部にはいつた。ただし、文学部といっても地理学の専攻である。高等学校の上級にすすんだころには、もう内地の山のぼりでは満足できなかつた。あらゆる機会をつかまえて外地へ、國外へとエクスペディションをこころみた。ポナペ島にわたるまえに、わたくしたちは、ひととおり遠征の経験者になっていた。

一九三八年の夏、川喜田は、安江安宣氏とともに、北硫黄島をおとすれて、このグループとしての行動の幕を切っておとした。一九四〇年には、梅棹・藤田・伴の三人が、北朝鮮の山々の総まくりをくわだてて、敦賀をで

ていった。清津から冠帽峯山脈を横断し、摩天嶺をこえ、白頭山に向ってから一行の消息はとだえてしまった。健康のつごうで、出発の当日に足どめをくって京都にのこっていた吉良はいらいらして氣をもんだ。半月ちかい空白ののち、つぎのたよりは、突如として滿洲の長春からまいこんできて、留守本部を仰天させた。白頭山の頂上ちかくで、航空写真測量による極秘の地図をみた三人は、それを紙きれにすきうつしたのをもつて、白頭山の北面の密林地帯——金日成一派の共産ゲリラの活躍舞台であった——にとびこんでいたのであった。幸か不幸か、航空写真の修正製図にまちがいがあって、白頭山の火口湖天池から流れでるスングアリーの水源地が、谷ひとすじくいちがっていたために、三人は予想しない危地においこまれた。六日間の不安な旅ののち、スングアリー水源の訂正確認という、おもいがけない收穫をたすさえて、ポロポロの霜ふり服すがたが、滿洲がわの警備隊員をおどろかせた。この、当時の実力からみて、かなり放膽な行動が、うまく成功して、わたくしたちは、おおいに氣をよくしたものだ。おなじ年、川喜田は、滿洲がわの調査隊に参加して、西から白頭山の外輪山の一角に達した。その年の暮れから、一九四一年の一月にかけては、京大の学生にまじって、まだ三高の学生であった梅棹が、冬のカラフトのポロナイ・ツンドラに、犬ぞりと超短波無電機の性能のテストをこころみた。

一九四一年には、みんなが、京都大学の学生として、顔をそろえた。これで、やっと一人まえになれた。いよいよこの力を、日本の探検界の最大の支柱にしなくてはならない。わたくしたちは、まじめにそう考えていた。わたくしたちの頭には、オックスフォードの偉大な学生、ジノ・ワトキンスの夢があった。

ワトキンスは、わずか二二歳の一学生のとき、すでに二回の極地探検のリーダーをつとめてきていた。そのうち、犬ぞりによるラブラドルの探検は、かれを、王立地理学会の金メダル受賞者——ゴールド・メダリストといえは、英國探検界の最高位のひとびとなのだ——とした。「うまれながらのリーダー」というおり紙をつけられ

たかれは、つづいて一九三〇年、一九三二年と、グリーンランドに二度の探検をひきいた。そして、第二次遠征でかれは死んだ。わずか二五歳であった。しかし、まかれた種は死ななかつた。かれの出現によって、オックスフォード探検クラブの主導権は、フロックコートのお歴々から、学生あるいは学生あがりの若手にうつった。学生たちは、エルスメアランドに、みごとな探検記録をのこした。一九三〇年のグリーンランド探検隊の最年少者のひとりであったリンゼイは、一九三四年には、犬ぞりによるグリーンランド横断をやつてのけた。このときはじめて極地探検にくわわつたクロフトは、つづくスピッツベルゲン北東島の探検に、おもなメンバーとしてくわわつてゐる。

日本は、探検の傳統の確立という点では、イギリスよりも決定的におくれている。だが、かれらのやつたことは、われわれにだつてできる。日本に、若い探検家のグループをつくること。そして、探検の傳統を確立すること。幸いなことに、京都には、若手の乗取るべき大学人の探検クラブがあつた。それは、京都探検地理学会といつた。そのころの京大総長羽田亨博士を会長に、おもに京大関係の、おおくの有名な学者たちを会員にもつていた。梅棹たちは、白頭山からかえつたとき、すでに、探検地理学会の月一度の例会で、お歴々をまえに講演するという、高校生としては破格の光栄に浴していた。ちょうどそのころ、やはり探検地理学会の理事であつた駒井卓博士らの御厚意で、理学部の動物学教室のうらの小さな建物で、われわれ学会のジュニア・メンバーのクラブ・ハウスにあてがわれた。ここを根じろに、われわれは、いよいよ探検地理学会の乗取りにのりだした。

しかし、オックスフォードの場合とちがって、わたくしたちのなかには、卓越したリーダー、ワトキンスがいなかつた。そのかわり、京大には、すこし年齢ははなれていたけれど、やはり偉大なリーダー、今西さんがいた。わたくしたちは、そろって今西さんの門をたたいて、今西リーダーのひっぱりだしに努力した。とうとう今西さ

んはひきうけた。契約は、成立した。一九四一年のボナペ島は、その第一回の契約履行であり、このグループの實力の瀬ぶみでもあった。三人は、この入門試験に合格した。ボナペ島の報告書づくりを機会に、われわれの學問的實力も、きびしくたたきあげられていった。一方、藤田は、アムール水系の旅はうまくはこばなかったが、單身熱河にはいってドロンにまで足をのぼし、伴は、やはり熱河から隊商にまぎれこんで國境をこえ、内モンゴリアを縦断してかえってきた。實力のテストはおわった。えらばれたつぎの目標はどこ、それがこの北部大興安嶺なのであった。

この目標が、いつ、どうしてきまったものだったか、いまではだれもよく覚えてはいない。しかし、計画そのものは、すでに一九三九年に、一度今西さんによってくわだてられていたから、だれの頭にも消えがたくのこっていた。たぶん、ボナペからかえる船のうえ、うつくしい熱帯の夜になごりをおしんで、船尾の甲板のうえにこしかけて、夜光虫のえがきだすスクリュウのあとに見入っていたとき、とめどもなく流れだしてきた話題のなかから、しだいに現実味をおびてきたものだったろうとおもう。ふかい朝霧にとざされた、秋冷えの横浜に上陸したとき、われわれの決心は半ば以上きまっていた。そして、京都にかえってまもないある日、今西さんは、われわれのまえで、ポツリとこういったのだった。

「わしは、やろうとおもう。」

「やりますか、いよいよ。」梅棹がニコリとした。

「目標は？ ルートはガン河ですか、ゲン河ですか？」川喜田がのりだした。

「イキリ山をこえる。三河からモーホだ。」今西さんの答えはみじかい。

「三河からモーホか。三度以上あるな。まず一〇〇〇キロとふんで、三ヶ月だな。」藤田は目算を立てた。

「かなり手ごわいな。やれますか？」と吉良。

「やれる！」今西さんは語氣をつよめた。

「君たちがいる。そして、わしがいるではないか。われわれにやれなくて、だれがやるのだ。」

「やろう！」伴がすっとんきょうな声をあげた。はがね色に空の澄んだ、秋の日のことだった。

大興安嶺探検隊は、こうしてできあがった。

〔註〕

① 川喜田二郎（一九三九）硫黄列島。三高山岳部報告一四号、一三一—二三ページ。

② 梅棹忠夫・藤田和夫（一九四三）北鮮・白頭山。三高山岳部報告一五号、一—八五ページ。梅棹忠夫（一九四二）白頭山をこえて滿洲へ。京都探検地理学会年報第二輯、三三—四七ページ。

傳 統

統

傳

一九三五年の新年、京都大学白頭山遠征隊は、日本の登山史あるいは探検史のうえに、ひとつの新らしいエポックを画して、京都にかえってきた^①。その隊員のうち、隊長今西さんをはじめとして、西堀さん、奥さん、谷さんの四人のひとびとは、京都一中の出身者であった。四人の先輩たちは、ある日、遠征の記録映画をたずさえて母校をおとすれ、講演した。講堂にあつまった一〇〇〇人の少年たちが、先輩たちの熱のこもった講演と、ぼう大な山体を白雪にかがやかせている白頭山のすがたから、どんな感銘をうけたかは、数年のうちに明るみにでた。大興安嶺探検隊の隊員のうち、五人までが、この一〇〇〇人の少年のなかから、あらわれてきたのである。

ここには、傳統というもののありかたが、典型的なかたちでしめされている。探検の傳統にとほしい日本でも、わたくしたちには、わたくしたちなりに、現実的な傳統の地盤があったのである。ごくおさない子ども時代ならいざしらず、ほかの学生たちが、卒業後の就職や、らかな兵役のコースに頭をひねっているような時期に、わたくしたちだけが、探検家になろうなどという、およそ当時としては非現実的な夢をもちつづけていたのには、それ相應の傳統の支持があった。この大興安嶺探検の主体となったものは、たしかに、わたくしたち五人のグループではあったが、それにいたるまで、おおくの先輩たちが苦心してそだてあげてきた傳統をはなれて、偶発的にこういうグループのなりたちうる可能性はなかったであろう。京都には、それだけの地盤がそなわっていたのである。

もともと、京都というところは、日本における近代アルピニズムの發展に、おおきな役わりをはたした土地であった。大正の末期から昭和のはじめにかけて、日本アルプス登山の黄金時代に、京大および三高系のひとびとの活躍は、めざましいものであった。その人たちは、日本の登山界では、「京都派」などとよばれていたが、組織としては、A・A・C・Kという会をもっていた。アカデミック・アルパイン・クラブ・オブ・キョウトの略称である。京都大学白頭山遠征隊も、じつは、このA・A・C・Kの事業であった。

当時の日本には、まだ探検界というようなものはないから、A・A・C・Kの人たちも、登山家として有名であった。もちろん、有能なアルピニストぞろいであったことはいうまでもないが、この人たちの山の登りかたは、たんに野外での肉體運動をたのしむという意味でのスポーツ登山ではなかった。かれらは、はじめから初登山をねらっていた。かれらの登山は、探検的登山であった。それで、すでに内地には処女峯なく、ヴァリエーション・ルートも盡きたとき、かれらの開拓者精神は外地にそのはげ口をもとめたのであった。そして、一九三

五年のA・A・C・Kの白頭山遠征は、日本登山界の外地遠征時代の幕を、はなばなしく切りおとした。そののちの数年間というものは、おもに学生登山家からなるいくつもの遠征隊が、続々として外地に向った。千島、台湾、濟州島、樺太等々。そのころの、日本山岳会の機関誌「山岳」や、関西学生山岳連盟報告などには、ほとんど毎号、外地遠征の記録がのった。台湾をのぞけば、それらの外地の山は低く、登山技術の点からもさほど困難ではなかった。これらの遠征は、たんなるスポーツ登山というよりは、むしろ「遠征」そのものを目標にしていた。そして処女地の開拓を目標にしていた。

A・A・C・Kは、名まえのしめすとおり、「学士」たちの団体であった。それは、京都派のシニア・メンバーであった。これにたいして、ジュニア・メンバーたる学生たちは、京大のなかに、べつの団体をもっていた。やはり若いアルピニストたちの集まりであったが、京大ではほかの大学のようには山岳部とはいわずに、傳統的に「旅行部」と称していた。もちろん、A・A・C・Kと旅行部とは、緊密な連絡のもとに行動した。そして、白頭山に刺激された日本の学生登山界が、外地遠征をしきりにくわだてていたころ、このふたつの団体は、いつのまにかもう一足さきをあるいていた。かれらは、外地では満足せず、國外へでた。

一九三六年、加藤泰安は、旅行部の現役をひきいて、冬の大興安嶺に遠征した。これは、のちのわたくしたちの探検隊とは反対の、鉄道から南の中部大興安嶺に、地図上の最高峯をもとめていったのである。しかし、めざす山は、頂上までカラマツにおおわれ、一八三五メートルという地図の標高も、いまから考えると、ほとんど信用できない。しかし、遠征としては、りっぱな成功であった。^③おなじ年、今西さんは、冬の東部満洲をあるいている。あくる三七年の夏には、加藤泰安は、單身ホロンバイルから内モンゴリアにはいった。モンゴルの地は、このグループのながいあこがれのまどであった。かれは、ウジュムチンで、エーデルワイスの咲く土をにぎって

ポロポロ涙をこぼしたそうだ。

一九三八年には、A・A・C・Kは、木原均博士を隊長として、大挙して内モンゴリアにはいった。これは、自動車旅行ではあったが、東は熱河から北はダブス・ノール、西は百靈廟までを、二ヵ月にわたってくまなくかじめぐった^③。おなじ年、旅行部もまた、鈴木信隊長のもとに、前後して内モンゴリアをおとすれた^④。一九三九年には、今西さんは、森下さんとともに、ふたたび内モンゴリアにわたり、グンシャングク砂丘地帯にはいった^⑤。ポナペ島・大興安嶺と、二年つづけてわたくしたちの副隊長であった森下さんは、ここではじめて海外遠征に参加したのであった。おなじ年、周布光兼を隊長とする学生隊は、メルゲンから北にむかって、北西小興安嶺を縦断し、アムール江岸のコマに達した^⑥。この隊は、大興安嶺の瀬ぶみの役わりをある程度はたした。わずかながら濕地旅行の経験もつみ、八ミリの記録映画は、わたくしたちにも、つよい印象をあたえた。注目すべきことは、三八年ごろを境に、これらの遠征は、多分にスポーツ的な遠征登山から、しだいに本格的な探検——學術探検へと重点をうつしつづつあった。一九三九年の一月には、京都探検地理学会ができて、國外遠征の主体が、A・A・C・Kや旅行部から探検地理学会のほうへうつったのも、この変化をものがたっている。従來のアルピニスト系の人たちのほかに、おおくの活潑な野外研究者たちがくわわることによって、京都探検地理学会は、學術探検隊をおくりだす母体として、申しぶんのない実力をそなえるようになった。

探検地理学会の創立直後には、イラン、ニューギニア奥地などをめざす、大學術探検隊の計画が、矢つぎばやにたてられたが、太平洋戦争直前の緊張した國際情勢は、その実現をゆるさなかった。しかし、シニア・メンバ―たちが、こうした情勢にいそがしくうごいているあいだも、ジュニアスはじっとしていなかった。一九四〇年には旅行部員が総出で、探検の基礎技術のひとつとしての、超短波無電による空地連絡のテストを、富士山を舞

台にくりひろげた。梅棹たちは、夏の休みに白頭山をこえ、川喜田もまた白頭山をおとすれたのは、まえにのべた。これと前後して京大からは、中尾・松森が、やはり北鮮の山にふみこんでいた。冬には、旅行部から、藤本武ほか五人が、カラフトに、白瀬中尉いらいはじめての犬ぞり旅行の経験をつんだ。

こうして、一九四一年のボナペ島遠征がきた。探検地理学会の名のもとにおこなわれる最初の遠征にしては、すこし貧弱すぎはしたが、開戦直前ともあれば、やむをえなかつたのであろう。その年の十二月開戦とともに、当時の旅行部のアクティヴ・メンバーが、ごっそり兵隊にもってゆかれたことを考えると、もっともわかいわたくしたちのグループが、じきじき今西さんの訓練をうけたのは、結果からみても、ひじょうに好都合であった。もっとも、伴と藤田とは、一時的にせよ南方に轉向するのをいさぎよしとせず、大陸に初志をおした。また藤本も、單身測量隊にくわわって、中部大興安嶺の一部をあるいた。

玉石とりませとはいいながら、よくもこれだけ毎年々々エクスペディションをやつたものだ。ひとつのグループとして、わずか数年のあいだのこの記録はたしかに驚嘆すべき活潑さであった。このグループの人々をささえていた、根づよい未開地への意欲こそは、まさに、日本における最初の探検の傳統とよばれるにあたいしよう。しかも、いくつかの散発的な南方へのところみをのぞいて、その対象が、すべて大陸に集中していたことは、注意を要する。かれらの眼は、あきらかに西に向いていた。朝鮮から満洲へ、満洲からモンゴリアへとのびて、さらに西へ、大陸の中央部へと向いていた。この人たちは、いったい、なにをめざしていたのであろうか。

近代探検の歴史には、いくつかのエポックがある。おそらく、その第一期は、コロンブス、ヴァスコ・ダ・ガマにはじまる、植民地獲得のための探検であつたらう。アフリカ奥地の探検、北西航路と北東航路への挑戦は、この時代の最後をかざる。そして、北西航路の探求にはじまつた極地探検は、しだいに、探検そのものための

探検へと変化して、一九〇九年のペアリーの北極到達、一九一一年のアムンゼンの南極到達を中心に、極地探検の黄金時代をつくりだした。いまや人類の到達をばんでいる残された地点は、高アジアの南縁にならぶヒマラヤの巨峯たちをのぞいてほかにはなくなった。探検の極地時代とならんで、一九世紀なかごろにはじまった中央アジア時代も、ヘディンその他の活躍によって、ひととおりの地理的発見の時期はおわっていたが、十数座にのぼるヒマラヤの八〇〇〇メートル級——ヒマラヤン・ジャイアンツは、なお人類の接近を拒否しつづけて、高アジアの魅力をもちつづけている。アルピニストとして出発したA・A・C・Kの人たちも、その最初の目的をヒマラヤン・ジャイアンツにおいていた。冬の白頭山遠征は、終始ヒマラヤ遠征級の装備でおこなわれた。そして、じつは、A・A・C・Kは、すでに二回にわたってヒマラヤ遠征を具体化させていたのであった。A・A・C・Kは、当時としては、まさに全日本の代表者として、ヒマラヤに挑戦するだけの実力をそなえていた。しかし、二度の計画は、運わるく、満洲事変と日華事変との発生によって、それぞれ実現一步手まえで、ついえさってしまったのである。

時局の変化は、ヒマラヤへの途をとざした。けれども、高アジアの魅力は、ひとびとを、たえず大陸の内部へ内部へとひきつけてやまなかつた。シニア・メンバーたちが、若いアルピニストからすぐれた野外研究者へと成長するとともに、登山は探検へとかわったが、一步でも大陸の内部へと近づこうとする気もちにかわりはなかつた。大陸内部への道に、ひとつでも白色地帯があれば、ひとつずつそれをうすめてゆこう。そして、南からヒマラヤへの道がとざされたのなら、北から、より困難な、しかしより探検家にとって魅力的な道から近づこう。これが、いままでのべてきた遠征をつらぬいている、ひとつの夢であったようにおもわれる。

北部大興安嶺こそは、この西への道によこたわる、もっともおおきな眼ざわりであった。そこは、地理的にも

なお白色地帯にちかい処女性をもっていた。そこには、シベリアのタイガにつづく、ひろびろとした樹海があった。たとえ、アムールをこえてシベリアにふみこむ可能性は、まったくなかったとしても、アルピニストや探検家のもつ本能的な北方へのあこがれを、かなりの程度にまでみたくしてくれるに相違なかった。滿洲にいる日本の科学者たちも、たびたびここに手をのばしては、失敗していた。おそらく、ここ数年のうちには、その中央部の探検が、これらのひとびとの手で成功するだろう。そのころの日本の科学者にとって、行動の可能な、もつとも西にある地域は、いうまでもなく内モンゴリアであって、モンゴリアの学問的空白は、ちがった意味での白色地帯として、もつとも強い魅力をもっていたけれども、この北部大興安嶺というみごとにまとまった探検の場を、みすみす素通りしてゆくことは、とうていできなかった。

この探検に成功したら、そしてようやく探検家の卵にまでそだってきたわたくしたち若手が、その経験を同じて一人まえにまで成熟することができたら、また大興安嶺の樹海のなかにすんでいる狩獵民族の生活をマスターして、ボナペの原始採集経済段階の民族から、中央アジアの遊牧民へと研究をすすめるステップとすることができたら、——そうしたら、もうなんの心のこりもなく、西に向ってすすむことができるだろう。内モンゴリアのどこかにすみついて、たんなる調査旅行のわくからはずれた、本格的な研究がやれるだろう。それも、アンドリュースの百万ドル蒙古探検隊のような、特殊な専門的興味のものではなくて、じかにモンゴリアの自然と人間とにとっくんで、そのうえにおおいかぶさっているアジア的停滞そのものの本質にまでせまってゆけるだろう。これが、大興安嶺探検にのりだしたときの、隊長今西さんの、そしてわたくしたちの、いつわらない氣もちであった。

統

傳

二年半ののち、わたくしたちの一部は、この望みをはたして、張河口に住んでいた。しかし、ここは、そこま

で筆をすすめるおりではな^⑩。(以上二節 梅棹・吉良)

〔註〕

- ① 京都帝國大学白頭山遠征隊 (一九三五) 白頭山。東京、梓書房。
- ② 京都帝大旅行部 (一九三六) 雪のホロンバイルより大興安嶺へ。山岳第三一年一号、九四—一三一ページ。
- ③ 木原均 (一九四二) 内蒙古の生物学的調査。東京、養賢堂。宮崎武夫 (一九四三) 内蒙古横断。東京、朋文堂。
- ④ 宮崎武夫・鈴木信 (一九四二) 内蒙古の調査旅行。山岳第三六年一一二号、一一二八、五一—一〇三ページ。
- ⑤ 今西錦司 (一九四七) 草原行。武生、府中書院。
- ⑥ 京都帝大旅行部 (一九四〇) 小興安嶺横断記。山岳三五年、六九—一〇六ページ。
- ⑦ 今西壽雄 (一九四二) 富士山における無電並びに空地連絡演習。京都探検地理学会年報第二輯、七—二二ページ。京都帝大旅行部 (一九四二) 富士山に於ける空地連絡試験報告概要。山岳第三六年一号、一—三〇ページ。
- ⑧ 藤本武 (一九四二) 冬期樺太踏査行。京都探検地理学会年報第二輯、二三—三二ページ。梅棹忠夫 (一九四三) 犬橈の研究。探検三号、七八—一五四ページ。
- ⑨ 今西錦司 (一九四四) ボナヘ島・生態学的研究。東京、彰考書院。
- ⑩ 一九四九年はじめてから敗戦までのあいだ、今西錦司・森下正明・梅棹忠夫・加藤泰安・中尾佐助らは、カルガンの西北研究所員として、内モンゴリアの生態学的研究にしたがった。その研究業績は、まだごく一部しか発表されていないが、あらかしの報告としては、つぎのものがある。今西錦司 (一九四八) 遊牧論そのほか。大阪、秋田屋。

大興安嶺の密林地帯

大興安嶺という名まえが、ゴビの沙漠や揚子江の名とならんで、東アジア大陸のシンボルのひとつとして、日本人の記憶にしみこんだのは、かなりふるい昔のことである。たぶんそれは、日露戦争のころ、大興安嶺山麓の

鉄道爆破をこころみた沖・横川や、それをめぐって熱河のカラチン王府で活躍した河原操子などのひとびとが、國民の英雄としてものではやされた時代にまでさかのぼるのであろう。すくなくとも、戦争以前の軍國主義の時代を経験してきたものにとって、大興安嶺という名が、いつも、なにほどかのスリリングなひびきをもっていたことはたしかのようだ。

ところが、この大興安嶺という名は、ひとびとの心のなかに、どんなイメージをいだかせているか。これが、なかなかおもしろい。ゴビの沙漠や揚子江の名のあたえるイメージにくらべると、大興安嶺のそれは、おそろしく各人各様なのだ。つまり、その地理学的な特徴は、名まえほどには、一般の常識とはなっていないのである。こい茶いろにぬられて、滿洲平原の西のはしを一直線にかぎっている地図上の興安嶺は、たいていの日本人にはびょうぶを立てたような連嶺を想像させる。しかし、いったいその山は、雪をいただく高山なのか、岩山か、それとも密林におおわれているのか、とたたみかけられると、サッということになってしまふのだ。

ふつうの旅行者が大興安嶺のなぐめに接するのは、ハルビンから滿洲里に通じる鉄道の峠にかぎられている。浜洲線の列車が、チチハルの南で嫩江を西にわたると、やがて草におおれたなだらかな起伏が、ゆくてにあらわれて、ながい平原の旅につかれた眼をたのしませる。峠が近づくとつれて、丘はしだいに山らしくなり、谷もせまってくる。そして数時間ののち、列車は、さして急ではないが、雄大な大スロープにジグザグをえがいて、分水嶺の峠にさしかかる。しかし、もし旅行者が、けわしい、びょうぶのような連山を心にえがいていたとすれば、その期待はうらぎられる。しかも、峠から西への道は、東がわよりは一そうなだらかな、大波のように起伏する丘のあいだを、いつとはなくホロンバイルの高原にすべりこんで、名にしおう大興安嶺をこえてきたとはうけとれないのである。峠のあたりには、わずかの木立ちもみられるが、たいていの山々は草におおわれ、とりた

ていうほどの岩山もない。つまり、大興安嶺というのは、平均高度一〇〇〇メートル以上もあるモンゴリアの高原が、低平な満洲平原へと不連続にうつりかわる境目にそうて、モンゴリア高原をふちどっている、はばひろい山地の帯であって、山そのものは、さして高山的なものではない。それが、びょうぶを立てたような大山脈にみえるのは、大縮尺の地図のあたえるトリックであって、現実の印象からはとおいものなのである。

日華事変のはじまるころ、まだ高等学校生だったわたくしたちのもっていた知識は、この程度をたいしてこえるものではなかった。しかし、大興安嶺のような長大な山脈を、その一ヶ所だけから判断するのは、とんでもないまちがいである。鉄道から北、國境に達するまでの大興安嶺は、まるでちがった様相を呈しているのである。まず、そこは、廣大な密林地帯であった。わたくしたちにとって、これは一種の心理的な再発見であった。

日本人は、山といえばみな木がはえているものだと思っているから、鉄道以南の大興安嶺が、大半はだか山であることを知ると、なるほど乾燥した大陸の山とは、そんなものだったか、となっとくする。この発見の印象がよいので、こんどは、大興安嶺はどこへいってもそんなはだか山だと思ってしまう。だから、密林の大興安嶺の再発見の印象は、ひとしお強かったのである。おさないころ、大興安嶺の密林を舞台に、縦横に大活躍する少年小説の主人公に、血をわかせたときのおもいだが、よみがえってきたのかもしれない。再発見された大興安嶺の密林は、探検の対象として、やはり魅力的なロマチックな色どりをおびていたのだから。

鉄道の峠からすこし北、北緯五〇度あたりを境として、大興安嶺はすっかりその山相をかえる。そこから南では、たとえせこましい地形になれたわれわれの山脈の概念からはとおくとも、大陸的なスケイルでみれば、ほぼ一定のはばをもった山脈のかたちをとっているが、北のほうでは、もはや地図にあるようなきわだった連山は存在しない。五〇度線から北の、アムール河とアルグン河とのえがく半円のなかをうずめているのは、急にすえ

ひろがりにひろがって、ひとつづきの高原と化した大興安嶺なのである。のちにじっさいの観察によってあきらかにされたように、東に流れてスナガリーにそそぐ河川と、西に流れるアルグン河の支流との分水嶺、すなわち地図上の大興安嶺は、このあたりでは山らしい山ではなくて、高い山々はかえって分水嶺をとおく西にへだたっている。分水嶺は、單に、西からと東からとの浸蝕力のつりあっている線にすぎないのだ。つまり、山脈としての大興安嶺は消えうせて、一大高原となってしまうのである。東はイルフリ・アリンをへて小興安嶺につながり、西は國境をこえてザバイカル山地につながるこの高原は、「滿洲高原」などとよばれることもあるが、ここではこれまでのならわしにしたがって、「北部大興安嶺」とよぶことにしよう。

この高原は、平均高度一〇〇〇メートルくらいの、頂きのまるい、晩壯年期の山々の無限のつらなりである。山々のあいだは、ふくざつにまがりくねったひろい谷によって、網の目のようにかこまれている。河々の谷には、悪性の濕地がひろがり、山々は頂きまで針葉樹の密林におおわれて、完全に文明人の交通をさまたげている。アムールとアルグンに沿うたものをのぞけば、このひろい山地の内部には、まったく部落がない。そのなかにいとなまれている人間の生活といえは、北方ツングースにぞくするオロチョン族のわずかな人口が、野獸をおうて轉々とすまいをうつしているだけであって、あの根づよい生活力をもったシナ農民も、ついにこの地方への入植には成功していないのである。

この北部大興安嶺の樹海は、南北が緯度にして三度半、東西が経度で五度のひろがりをもっている。もうすこし具体的にいうならば、そのなかには、北海道の全島がスッポリとはいってしまうのである。これにくらべるならば、中・南部大興安嶺などは、それこそびょうぶのようにうすっぺらいもので、段ちがいに魅力にとほしい。鉄道の峠のあたりにみられる森林は、この大樹海の切れっばしだが、ほそぼそと主稜づたいに南へ延長しているも

のにすぎないのだ。

このように、北部大興安嶺を文明からかけはなれたままに保ってきた重要な原因のひとつは、その氣候條件にある。滿洲の氣溫分布図をみると、滿洲の西北の一角は、一月の平均氣溫がマイナス三〇度以下をしめし、滿洲の寒さの極をなしている。すでに雪と氷との世界にある北緯七一度のスピッツベルゲンでさえ、一月の平均氣溫がマイナス一五度にすぎないのだから、この寒さはおそるべきものといわねばならぬ。この溫度では、地上のあらゆるものはいうまでもなく、地下何十メートルという深さまで、すっかり凍りついてしまう。もちろん、土のなかにある木の根もなにもいっしょにだ。ところで、マイナス一五度のスピッツベルゲンは、すでに寒さのために樹木のそだつことのできないツンドラ地帯に属するが、マイナス三〇度の興安嶺には密林がある。これは、矛盾した話のようだが、夏のあいだの溫度の問題である。スピッツベルゲンの七月の氣溫は、平均七度あまりしかないが、北部大興安嶺では、一五度ちかくはあろう。植物というものは、活動期である夏さえある程度あたたかければ、冬の休眠期に少々度はすれに寒くても、生きてゆけるのである。

しかし、このくらしいの夏の氣溫では、冬のあいだに地中ふかくしみこんだ凍結を、すっかりとかしてしまふことはできない。そこで、植物の根のはびこっている地表ちかくの土層だけは、夏のあいだとけてはいるが、もっと深くは一年ちゅう凍りつづけるという、奇妙な現象がおこる。こういう、長年にわたってとけることのない深部の土層——永久凍土層——は、ツンドラ地帯にこそめすらしくないが、北緯五〇度というこんな南のほうの森林地帯にまでみられるのは、全世界でも、東シベリアから北滿にかけての地方にかぎられている。この地方が、冬には強力な大陸高氣圧の根城となつて、世界第一の低温地帯をつくり、しかもその寒さから地面を保護する雪の量が、ごくすくないということが、この永久凍土の分布に關係している。

雨の量はすくないが、その大部分は夏に集中してふる。夏には、つきつきとつけてゆく凍土からしみでる水で、土はいたるところしめっており、凍土は水はけをさまたげるので、水びたし同然の土地もおおい。こういう土地にふった雨は、ほとんどたくわえられることなく、たちまち河はあふれ、谷を水びたしにする。いたるところ悪性の濕地がひろがっているのも当然である。濕地から流れでる水は、いつも不気味な茶褐色にいろづき、針葉樹の林のなかを、音もなくうねり流れる。

針葉樹の類は、北方森林の支配者である。けれども、いかに寒さに強い針葉樹でも、冬はマイナス三〇度以下、根は夏は水びたし冬は凍りつく、という條件のもとでは、どの種類もがはびこるわけにはゆかないらしい。このきびしい自然にたえうる樹木の種類は、きわめてわずかである。このえりぬきの強健な樹木の代表が、カラマツであることは、北部大興安嶺の樹海に、どくどくの特徴をあたえた。このカラマツの種類は、ダフリアアカラマツという。ダフリアというのは、アムール上流一帯の地方のふるいよび名である。もし、空から北部大興安嶺をみおろしたら、たぶんみわたすかぎりダフリアアカラマツばかりが、樹海をつくっているようにみえるだろう。それほど、ここにはカラマツがおおいのである。われわれのあるきははじめた五月の中旬には、まだカラマツの樹海は芽をふいていないで、山々は一めんにごまかなこすえのうすすみ色にぬりつぶされていた。六月の大興安嶺は、めざめるような新緑がうつくしい。われわれのなによりさんねんだったことは、このカラマツの海がこがね色にかわる秋の大興安嶺をみられなかったことだ。これだけは、いま思いかえしても、かえすがえすもくちおしい。シベリアの地誌をひもといてみると、いままで書きならべてきた北部大興安嶺の自然の特徴が、そっくりそのままではまる地方のあることをみいだす。エニセイ河の東、太平洋斜面と北氷洋斜面との分水嶺をなすスタノヴォイ山脈の西、このふたつにはさまれた、廣大な東シベリア山地一帯がそれである。エニセイスク、イルクー

ツク、ヤクーツク、ザバイカル（トランスバイカル）などの政治区画をふくむこの地方は、おそろしい冬の寒さ（一月の平均気温マイナス四八度の世界の寒極ヴェルホヤンスクは、ヤクーツク地方にふくまれる。ここにもカラマツの森林がある！）、高気圧におおわれてしずかな雪のすくない冬の天気、わりあい高温の夏、永久凍土層の分布、カラマツの圧倒的におおい森林など、まったく北部大興安嶺とおなじ自然条件をもっている。おなじ北方の針葉樹林帯でも、ちがった自然条件をもっている地方、たとえばエニセイ河から西の西シベリア地方や、スカンジナビア、スタノヴォイ山脈より東の沿海州、カラフトなどでは、冬の寒さがよほどおだやかで、低気圧や季節風のもとらす雪がおおく、寒さの地中へしみとおるのをさまたげるために、永久凍土層はほとんどみられない。そして、なによりもめだつた風景のちがいは、冬にも葉のおちない常緑の針葉樹のたぐい、なかんすくエゾマツ、トドマツのたぐいが、森林をつくっていることである。北海道やカラフトで、エゾマツ、トドマツの針葉樹林の、黒ずんだ緑いろの葉の厚ぼつたいかさなりをみた人が、あかるい大興安嶺のカラマツ林をおとすれたなら、おなじ北方針葉樹林にも、こんなちがったながめがあるのかとおどろくことだろう。

國境にとらわれない、自由な眼でながめれば、つまり北部大興安嶺は、東シベリア山地の一部なのである。ひろいシベリアのなかには、このくらいの大きさの未開地は、あちらこちらにあるだろう。そのひとつが偶然にもとじられた國境のこちらがわにあつた。しかも、軍事行動をゆるさない密林と濕地とのおかげで、一九四二年當時にも、一種の空白地帯として、國境の緊張から解放されていた。この偶然がさいわいして、われわれは、そのなかにもぐりこんでおもうままにふるまい、シベリアの自然に接することができた。しかし、いまとってみると、それはまことにみじかいチャンスであつた。いまでは、滿洲は事実上のシベリアの一部となり、北部大興安嶺は、手のとどかない鉄のカーテンのむこうにかくれてしまつた。

探檢の歴史 (1)

一九四二年のわれわれの探檢にいたるまでの、この地方の歴史をものがたろうとすれば、近世極東の政治史にふれないわけにはゆかない。一七世紀のすえから一九世紀の中ごろにいたる時代、ダフリア地方は、北西からシベリアをこえてきたスラヴの勢力と、北上する清朝の政治力との、一進一退するあらそいの場であった。探檢の歴史も、これをはなれては、理解することができない。

ロシアによるシベリアの探檢開発が、バイカルの東にのびて、ヤクーツクの町がはじめて建設されたのは、一六二九年にさかのぼる。これらの帝政ロシアの開発の目的が、第一に毛皮、第二に金にあったことは、いうまでもない。しかし、こういう奪略産業だけにたよってはいは、開拓前線が前進すればするほど、食糧の確保は困難となる。いままなおのこっている流刑地シベリアの傳統は、この問題を解決するために送られた、囚人の強制農業移民にはじまっている。しかし、シベリアの自然は、いまのソヴィエトの技術をもってしても、たやすくは農業をうけいれない。まして一七世紀の農業移民は、どんなにかみじめなめにあったことだろう。

ちょうどそのころ、ヤクーツクから南下したボヤルコフの探檢隊は、ヤプロノイをこえて、はじめてアムールに達した。アムールの谷には、東シベリアにはみられない、ゆたかな草木と、河ぞいの肥えた土とがあった。下流には、穀物がみのり、毛皮獣の群れる森林があるというニュースがあった。寒さにいじめぬかれてシベリアをぬけてきたロシア人にとって、これがどんなにおおきな魅力であったかは、あとに引用するクロボトキンの紀行にもうかがわれる。アムールの開発は、即座にはじまった。ハバロフのアムール下降探檢(一六四九―五二年)は、

ポヤルコフより数年のうちに、くわしい報告をもたらした。この報告にもとづいて遠征軍がおくられ、はやくも五六年にはブラゴエシチェンスクに、五八年にはネルチンスクに、あたらしくとりで、がもうけられた。めざましいテンポである。

その黄金時代にあった清朝は、これにたいして、ただちに反撃にでた。ただし、その政策は、もっぱら政治力と軍事力とにたより、実質的な開拓をとまなっていない。たとえば、農業開拓の前線は、はるか南方、北滿の呼蘭あたりにあった。しかし、北滿の原住民ツングースは、すでに清朝の軍事組織に編入され、いわゆる滿洲八旗の一員として動員されていた。アルバジン城の争奪戦に、従軍したオロチョンが奮戦したという記録は、この時代のことである。けれども、清の軍がしりぞくと、ロシアの移民はすぐ進出して、一六八七年ころには、ロシアは、ほとんどアムール地方占領のいきおいをみせた。

一六八七年のネルチンスク條約は、清朝のがわにおける、さいごの強力な政治的反撃であった。康熙帝のもとに充実しつつあった清の國力は、使節團に同行した大軍の圧力によってロシアを屈服させ、國境をアムールのかたまたヤブロノイ山脈の線におくことに成功した。清朝外交史上の大成功といわれるこの條約によって、ロシアは一時アムールの經營をあきらめ、勢力を東に轉じて、カムチャツカ、ベーリングの開發にのりださざるをえなくなつた。

一方、この條約は、大興安嶺の一角を、はじめて歴史に登場させる。ネルチンスク條約には、ロシア、シナ間の官營貿易協定がふくまれ、アルゲン河をへだてていまの三河地方の対岸にあたる一部落が、交易地に指定された。三年に一回の交易には、数百名の隊商が、北滿のメルゲンから、ノンニの支流ノミン河をさかのぼって、北緯五〇度のやや南で大興安嶺をこえ、ハイラル河の源流にあたるクルドゥル川の水源をへて、西に流れる根河ガの

支流アイケンを下ってアルゲンに達した。交易地は、一八世紀以後、外モンゴリアのキャフタにうつるが、この交易路は、その後も、北部大興安嶺ただひとつの峠道として存続した。

ロシアのアムール再侵略は、一九世紀にはいって、ふたたび強力にはじめられる。この一世紀の空白のあいだに、清は崩壊の道をたどり、ロシアは、強力な近代資本主義國家となりすましていた。大西洋、インド洋への道を、ヨーロッパ先進國にさまたげられたロシアは、極東の海へと根づよい努力をはじめた。クリミア戦争をきっかけとして、ムラヴィヨフたちは、一方的にアムール河航行を断行し、これによって極東の基地に送られた兵力は、英佛の聯合艦隊をうちやぶった。清は、もはやこの事態に抵抗できず、アイグン條約(一八五八年)によって國境をヤブロノイからアムールにまで引き下げなければならなかった。アムール地方を掌握したロシアは、さらに南下をつづけ、日露戦争(一九〇五—〇六年)によって出端をくじかれるまで、たえず極東に干渉したいきさつは、ここにくりかえす必要もあるまい。

この膨脹期のロシアの探検活動は、中央アジアから極東一帯にわたる、組織的な探検調査によって特徴づけられる。不世出の大探検家ブルシェワルスキーをはじめ、王立地理学会の学者たちや軍人による活躍は、めざましいものがあつた。北部大興安嶺に關係のあるものをひろってみると、一八六四年には、アナキストとして知られたクロポトキンが、その極東旅行の途中、まえにのべた交易路によって、西から大興安嶺をこえ、メルゲンをへてブラゴエシチェンスクに達している。そののち、クロポトキン・ルートなどとよばれるようになったこの隊商路は、ブチン兄弟(一八六四、七〇年)、ブチャータ大佐(一八九三年)などによってこえられた。一九一〇年には、モチュルスキー大尉が、ノンニの支流甘河をさかのぼり、アルバジハ河の上流をへて、モイホに達した。これらの記録のしめすように、北部大興安嶺は、その周辺部をかすめられたにとどまり、分水嶺から西の中央部は

まったく未知のままにのこされた。

以上の記録は、アーネルト博士^①によったが、そのくわしい内容はわからない。しかし、つぎに引用するクロポトキン自傳の一節は、このころのロシア探検隊の空氣の一端をよくつたえている。

「……わたくしたちは、地図のうえでみると眞黒なおそろしい大山脈の交叉点が、あんがい非常にらくなのを發見しておどろいた。その道でわたくしたちは、みすぼらしい一人のシナ老官吏が二輪車にのっておなじ方向に旅しているのにおいついた。この二日ばかりは路がずっとのぼり坂になっていて、あたりはいかにも高地らしい証拠をおびている。地面ははじめじめして、道はまるで泥だ。草もごく貧弱で、木もほそくいじて、おおく曲りくねって苔におおわれている。はげ山が左にも右にも立っている。わたくしたちは、いずれこの山ごえをするには大骨おりしなければならぬものとあらかじめ覚悟していた。すると例の官吏はオボのまえで、車からおりた。このオボというのは、石や木の枝をつみかさねたもので、それに馬の毛の束だの小さなポロキレだのが結びつけられてある。老人は自分の馬のたてがみをいく本かぬいて、それを木の枝に結びつけた。

「何です、それは？」

「オボさ。——このむこうにみえる川がアムールへ流れこむんだ。」

「では興安嶺はもうこれでおしまいですか？」

「さよう！ アムールまではもうこしてゆく山はない。小山だけだ。」

わたくしたちの隊商では大さわぎがはじまった。「この川がアムールへ流れてゆくんだとき、アムールへ！」とコサックはたがいにさげびあっている。かれらは、うまれたときから、老コサックから、よくこの大河の話

をきいていた。そこにはブドウの樹が野生し、平野がいく百マイルもつづいて、いく百万の人々に富をあたえているのだと。その後このアムールがロシアに合併されてからは、そこへゆく長い旅のことだの、最初の植民の辛苦困難をしたことだの、または上流地に移住したその同族の繁栄の話などを聞いていた。そして今わたしたちは、そこへゆく近道を発見したのだ！ わたくしたちの前は急な坂になっていて、その上をまがりくねった道が小川のほとりまで下って、そしてその小川は、山のはざまを通ってアムール河にそそいでいる。……

「おい、ここに変な木があるぜ。これあきつとナラだよ。」その急な坂を下っていったときにかれらがさげびだした。なるほどナラはシベリアにはないのだ。この高原の東の坂にくるまでは、一本もみあたらなかつたのだ。「おや、クリの木だ！」かれらはまたさげびだした。そして「あの木は何だろう？」と、シナノキやその他のロシアには生えない木をみていった。それは満洲植物地帯にぞくする木なのだ。いく世紀のあいだ暖國を夢みて、いままのあたりにそれをみたこの北國人らは、うちょうてんになっている。かれらは、豊富な草におわれた地面にねころんで、恍惚としてあたりをみやって、接吻でもしそうにしている。いまやかれらは、一刻でも早くアムールにつきたいという熱望にもえた。それから二週間のちに、二〇マイル以内のところ最後の露営をしたときなどは、まるで子どものようにじれてきた。夜中すぎるともう馬に鞍をつけだして、夜あけまえに出立しようとしたくしをせきたてた。そして、ついに高台からその大きな流れがみわたされたとき、一般に詩的感じなどのないこのにぶいシベリア人の眼も、この雄大なアムールの青々とした水をながめたときには、さすがに詩的熱情にかがやいたのであった。されば、おそかれはやかれ——あるいはロシアの政府の援助をかり、あるいはその援助をまたずに、あるいは又その意に反してすらも、——いまは荒漠とした、しかし將來は希望にみちみちたこの大河の兩岸と、北滿洲の廣漠とした無人境が、ちやうどミシシッピーの兩岸

がカナダの旅行者に植民されたごとくに、ロシアの移住者に侵入されるのは、あきらかなことであつたのだ。」
(大杉栄訳、クロボトキン全集第六卷。一部字句をあらためて引用した。)

このいきいきとした描写は、いろいろの点で興味ふかい。そのひとつは、東西の方向に非相称な、大興安嶺の構造のあらわれである。ゆるやかな西面にくらべて、格段に急な東斜面は、たちまちのうちに、旅行者を、ホロンバイルの高原より低い土地にみちびく。シベリアにみられないナラヤシナノキの出現は、高さとともに寒さが減じて、針葉樹のしげる亞寒帯から、温帯へとふみこんだことを意味する。しかし、こんなにまでコサックを狂喜させた温帯北部の風土——北滿洲は、「廣漠とした無人境」でしかなかった。南下してきた北國の人種ロシア人と、北上してきた南國うまれのシナ人との、北滿洲にたいする本質的な評價のちがいが、ここにあらわれている。ロシアと清との、アムール地方に対する政策のちがいも、おなじ原因にもとづく。北滿がロシアの勢力圏にあつたころの、ハルビンの農事試験場の活潑なうごきを考えると、北滿の黒土地帯の開墾は、あまりにもおそかつたといえる。そこが、名実ともに滿洲の穀倉となつたのは、わずか十数年來のことにすぎないのである。

話はよこにそれたようだ。シナ農業移民の北滿への流入もなかつたわけではない。ネルチンスク條約の前後には、やはり囚人の強制移民がおこなわれた。一八世紀中葉には、シナ本土の過剰人口の滿洲流入がはげしく、滿洲族のふるさとのシナ化をおそれた清朝は、一時は滿洲の封禁令(一七四〇年)をだして、移住を禁じなければならぬほどであつた。もちろん、南滿への移民は、すべて農業人口であつたが、北滿ことにアムール沿岸への移民は、あらゆるプロシテアの例にもれず、一つかみ千金を夢みる奪略産業の従事者がおおかつた。ちょうどそのころ、北部大興安嶺から流れだすアルベジハ河の流域に、ゆたかな砂金が発見されて、あらゆる方角からひと

びとをひきつけた。ジェルトゥガ金廠とよばれたこの産金地帯は、一八八〇年ごろもっともさかえた。この金廠について、もっとも興味のある歴史は、そこにあつまつたフロンティアの冒険者たちが、一種の「共和国」をつくっていたというものがたりであろう。かれらは、自治政府をもち、裁判官をもち、フロンティアにふさわしい特殊な慣習法をもっていた。人口は一二〇〇〇人に達したといい、大半はロシア人であったが、シナ人はむろんのこと、アメリカ人、フランス人、ユダヤ人までをふくんでいた。共和国は、一八八六年シナ軍によってたおされたが、かれらののこしたフロンティアの傳統は、いままなおのこっている。われわれの通つた老溝金廠には、等身大の金塊がでたという傳説がつたわり、生きのこりの老人の口から、ゴールド・ラッシュの時代の魅力ある思い出をきくことができた(二四六、二七六、二八九ページ)。

一九〇六年に日露戦争がおわり、ついでシナ、ロシアにつづいて革命がおこつてから、滿洲國の独立にいたる四半世紀のあいだは、探検史のうえでは、ひとつの特殊な時期をかたちづくる。この時代には、シナ、ロシアの政治力がおとろえ、たいした経済的意味をもたない西北滿洲などは、わすれさられたかたちとなった。日本の勢力は、南滿洲をよりどころとして、しだいに北上するが、そのころの日本の日本のレベルでは、未開地に調査隊をおくなどのことは、まだとても実現しそうになかった。おそらく一部の特務機関員などの暗躍はあったかもしれないが、記録にはのこっていない。しかし、眼をほかにうつすと、この時代は、帝國主義競争の色あいをおびた探検の時代がようやくおわつて、純学術的な探検が、とくに中央アジアをめぐるはなはなしくりひろげられたときにあたる。その代表者が、イギリスのサー・オーレル・スタイン、スウェーデンのスウェン・ヘディン、アメリカのロイ・チャップマン・アンドリュースらであったことは、これらの探検に國家主義的なおいのうすいことを、はっきりとものがたっている。この一般的な傾向を反映して、北部大興安嶺もまた、直接的な利害關係をもた

ない、第三國の學者たちによって、純學術的な探検をうけた。しかも、すくなくとも確實な記録のしめすかぎりでは、ようやくこの時代になって、はじめてその中央部の地帯に、文明人の足あとがのこされるのである。

〔註〕

- ① アーネルト（一九三九）滿洲の探検と鉱業の歴史。東京、興亞書院・学藝社。

探検の歴史 (2)

北部大興安嶺探検のパイオニアとしては、まず第一に、シロコゴロフ夫妻の名をあげなくてはならない。セルゲイ・ミハイロヴィッチ・シロコゴロフ教授は、一八八九年に生まれ、パリで人類学をおさめたのち、ロシアの王立アカデミーに席をおいた。ツングース学の第一人者としての、教授の北方ツングース諸族の研究は、一九一二年にはじまり、一九一三年にかけて、ザバイカル地方に三回の調査旅行をこころみたのが皮切りであったが、それ以前にも、ヨーロッパ・ロシアの北部、コーカサスなどに學術探検をこころみており、はえぬきのフィールド・ワーカーであったことがわかる。われわれにとって重要なのは、一九一五—一七年の滿洲およびモンゴリアの探検旅行であって、そののちは一九二二年までウラジオストクにあって極東の研究をつづけ、革命のあとは、白系露人としてシナに亡命した。一九三〇年から一九三九年になくなるまでは、北京にすみ、シナ全土の調査研究にしがっている。

一九一五—一七年に、シロコゴロフは、北部大興安嶺地帯のツングース族の調査に主力をそそいだ。そのあいだに、シロコゴロフと、よき協力者であった夫人とは、この地方に数回の旅行をこころみ、そのうちすくなくと

も一回は、ふたりのユサクをともなつて、アルグン河の谷から、マレクタ河——ジン河——ビストラヤ河流域——クマラ河上流をへて、北部大興安嶺の中心部を、東西の方向に横断している。そのころ、まったくの処女地であった北部大興安嶺は、探検家としてのシロコゴロフ夫妻の興味をつよくひいたらしく、各所で経緯度の測定をおこない、河川や水系について、できるかぎりの正確さで記録したとべている。そのあらまは、夫人の手によって、「北西滿洲・地理学的スケッチ」^①という露文の報告となつて、一九一九年出版されたが、その原書はいまだにみる事ができない。一九三三年に、大著「北方ツングースの社会構成」^②が英文でかかれたときには、すでに亡命のために資料がうしなわれており、ことに地図の原図が欠けていたのは、かえすがえすもおしまれる。しかし、この本にも、北西滿洲の自然景觀の描写のために、かなりのページがあてられており、ごくかんたんな概念図とあわせて、北部大興安嶺のかなり正確な概念をえることができる。

まえにのべたように、この地域の大興安嶺が、ザバイカル山地の延長ともいふべき一大高原であることをあきらかにし、これに滿洲高原という名まえをあたえたのは、シロコゴロフの功績である。そのほか、この高原の中央部が、ビストラヤ河の流域にぞくすることも、はじめてあきらかになつた。ビストラヤは、東経一二〇度にちかい地点で東からアルグン河にそそぐ大支流であつて、滿洲がわではニウル河とよばれているが、この河はシロコゴロフ以前に考えられていたよりもずっとながく、地図にみるようなふくざつな屈曲をなして滿洲高原のなかを流れていることがわかつたのである。そのほか、ガン、ゲン、ビストラヤ、マレクタ、アルベジハ、パンガ、クマラなどの大河の流域の相互關係のはっきりしたこと、ビストラヤとアルグンとのあいだに、大興安嶺の分水嶺と平行してそれよりも高いジン山脈の存在すること、滿洲高原の山々は一般に森林におおわれているが、ところどころに森林限界をぬいた四〇〇〇フィート以上の高峯のあること、などは、いちじるしい地理的発見であつ

た。

民族学上の發見の重要さについては、いまさらいうまでもあるまいが、そのなかでも、この地方のほとんど唯一の住民であるツングースの、地域的・民族誌的なグループの分布をあきらかにしたのは、地理学的にもひじょうに重要な發見であつたといえよう。シロコゴロフによると、北部大興安嶺には、つぎの四つのツングースのグループがある。

馴鹿ツングース　滿洲高原の中央部から西北部、ビストラヤおよびアルバジハ流域。トナカイを家畜として

飼っている。

クマルチエン　パンガおよびクマラ河流域からイルフリ・アリン一帯。家畜としてウマを飼う。

メルゲン・ツングース　イルフリ・アリン以南のノンニおよび支流ゲンの流域。ウマを飼う。

興安ツングース　ガン河流域およびクロボトキン・ルート以南の中部大興安嶺の東西両斜面。ウマを飼う。

滿洲にいた日本人たちは、これらのツングースを、かれら自身の呼び名にしたがって、オロチョンとよんでいた。オロチョンというのは、トナカイをもつものを意味する。そして、トナカイ・ツングース以外の三つのグループは、遊牧文化との接触と草原に近い環境の制約とによつて、ウマを飼うようになっていて、**「馬オロチョン」**とよばれ、トナカイ・ツングースは**「トナカイ・オロチョン」**とよばれていた。この本でも、ツングースのよび名は、このならわしにしたがっている。

シロコゴロフの英文の著書の出版にさき立つこと数年、ひとりの女流民族学者が、やはり、ツングースをもつて、この地方にはいった。かの女はリンドグレン嬢といい、一九二九年、ひとりのノルウェー人をつれて、三河から、ビストラヤの河口にあるウスト・ウロフ（キラムトすなわち奇乾の対岸）をへて、ビストラヤの中流にはい

り、おもに支流ニジネ・ウルギーチ附近のトナカイ・オロチョンを調査した。調査回数は、冬をふくんで三回におよび、そのほかガン河の上流や、南方の地方で、馬オロチョンやソロン族の調査をもおこなった。リンドグレンの研究内容はよくわからないが、その旅行談は、いちはやく一九三〇年のジョグラフィカル・ジャーナルに発表され、数枚の写真がそえられていた。^⑧ およそ、地図と写真のない旅行記ほど、もどかしいものはない。シロゴロフの精密な自然描写も、しょせんは、リンドグレンの数枚の写真にはおよばなかった。針葉樹林のなかを蛇行するビストラヤの流れや、トナカイにまたがったオロチョンの女たちの写真は、なによりも雄弁に、北部大興安嶺の樹海をつたえている。

この時代の学術探検の結果は、ドイツの景観地理学者ブルーノ・プレチュケの手によって集大成された。プレチュケは、一九三二年に、西北滿洲をおとすれた。まず、五月下旬から七月上旬にかけて、ハイラル―三河―ガン河―トゥラ河―ノミン河上流―クロボトキン・ルート―三河―ハイラルの行程をあるき、それから南に轉じてホロンバイル草原の調査にむかった。八月の末には、ふたたび北にむかって、三河からガン河をさかのぼり、支流ヤンギルチ（われわれの紀行にあるヤンギール）から、ビストラヤの支流ジン河をへて、難行のすえ、九月下旬にビストラヤに達した。はじめの予定では、アムールにぬける予定であったが、冬の接近と駄馬の故障とのため、ビストラヤ中流の右岸にある高峯オーコリドイ（われわれによって登られた）の直下からひきかえし、ガン河源流をへてハイラルにかえた。かれの報告は、「北西滿洲の山地」^⑨、「東ゴビの景観学諸性質」^⑩の二冊となつて出版されているが、とくに北部大興安嶺をあつかった前者は、ドイツ式の大部のモノグラフで、よくこれまでの研究をまとめあげている。とくに、おわりにつけられた地図は、大興安嶺の山系・水系を、ほぼあやまりのない概念図としてあらわした、貴重なものである。

プレチュケについては、われわれには、にがい思ひ出がある。プレチュケの「北西満洲の山地」は、すでに一九四一年に木内博士によって紹介されており、^⑥はやくからわれわれも注目していた。ところが、いよいよ具体的な探検の計画をたてるために、この本をさがしてみると、とうぜんあるはずの京都大学の図書室にみあたらない。あわてて東京大学へ借り出しを申しこんだが、とうとうまにあわなかった。もしこれがうまくみつかったら、つぎの節にでてくるような、むだな計画立案のくりかえしの必要はなかっただろう。なにしろ、われわれのよりどころとしていた、五〇万分の一の地図ときたら、およそ世のなかに、これくらいインチキなしろものはなかったのだから。一枚のプレチュケの概念図が、どのくらい貴重なものだったか、探検からかえってはじめたこれをみたわれわれは、おもわず卓をたたいてくやしがあったことだった。

話のでたついでに、このインチキ地図については、ひとこと悪態をついておかねば、腹がおさまらない。一九三二年参謀本部から公刊されていたこの地図が、どこの技術者により測量製図されたものかは、あきらかでない。地名そのほかからみて、ロシアがわの資料でなく、シナがわの資料にもとづいているらしい。アムール沿岸や鉄道沿線は、ロシアの八万四千分の一の実測図——いわゆるニウエルスト地図^⑦——をとりいれているらしく、精確であるが、この地図はアムールに沿ってわずか一〇〇キロはばの地帯をふくんでいるにすぎぬ。たとえば、われわれのルートぞいでは、ガン河の下流、トゥラ河の合流点までしかないのである。五〇万分の一のインチキ性は、そのみごとに第一級の製図の仮面にかくされている。等高線は、北部大興安嶺の中心部まで、じつにこまかく地形をえがきだし、何百何十何メートルまでの標高、山の名・河の名はいうにおよばず、森林・湿地・道路・部落の記号にいたるまで、いずれも確信にみちたもっともらしさで記入されている。おなじ参謀本部の地図でも、一〇〇万分一東亞輿地図になると、地方によって内容にも図法にもはなはだしい不ぞろいがあり、一見し

の調査隊のなめた、共通の苦勞であった。滿洲國ができてから、滿洲の奥地に対する日本人の関心は、とみに深まった。しかし、北部大興安嶺に関するかぎり、一九四二年以前の日本人の業績は、諸外國のものにくらべて、いちじるしく見おとりのするものでしかなかった。その原因は、野外調査もしくは探検の技術の拙劣さ、過去の知識の不勉強、國境地帯に対する日本軍の過度の祕密主義などにあった。

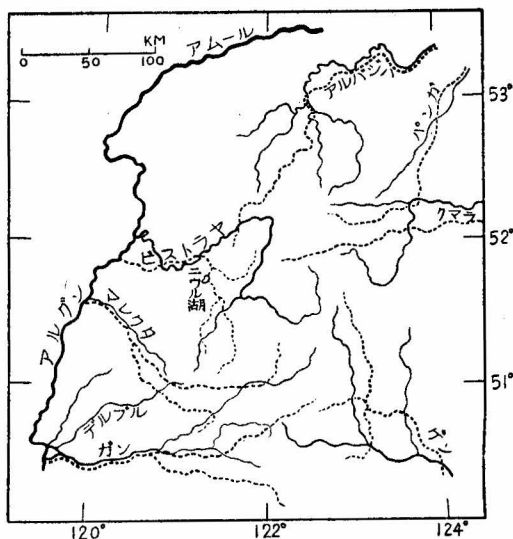


図 1. 北部大興安嶺のおもな水系。点線は 50万分の 1 図のあやまった水系をしめす。

て雑多な資料からの編輯図で、信頼度のひくいことがわかる。それにくらべて、五〇万は、なんと整然としてい
ることだろう。図のみごとさは、ゆうに日本の二〇万分の一図に匹敵し、まるで、この地図を信用しないで、い
たいに信用するのか、といわなければかりだ。

プレチュケの報告を見ぞこなったばかりに、われ
われは、これをもとにして計画をたてた。ところが
先發隊員伴が滿洲にわたってから、航空写真測量の
結果とてらしあわせてみて、まったくのでたらめと
しかいえないことがわかったのである。ここにあげ
た対照図は、そのでたらめさかげんを、痛快に暴露
している。これをつくった地図屋が、ビストライヤの
中流に、もっともらしくかきこんでおいた、十和田
湖ほどもあるニウル湖は、ジン山脈の山稜上にあた
り、しかも全然実在しないのだ。

このむだ骨おりは、滿洲國以後のすべての日本人